女子國文新編 第二版 巻八

375.9
Ka9
資料室

42286
教科書文庫
4
810
42-1931
200030842
S6.1931

文部省檢定濟
昭和六年二月十二日　高等女學校國語科教科書

女子國文新編

第二版

東京高等師範學校教授
垣内松三編

資料室
375.9
Ka 9

一　國民文化と國語教育との關係を基本として國民精神の涵養を意圖しました。

二　教材の選擇については特に文章の本質と學習指導の方法とを考慮しました。

三　縱に學年を貫き横に學期を連ねて組織的及び圓周的に教材を排列しました。

四　右編纂の大綱の外本書に關して必要なる事項は別に趣意書に詳記しました。

廣島大學圖書之印

廣島大學
教
39906
圖書

目次（巻八）

一 銀の猫……上田秋成……四
二 おどろのした……（増鏡）……一
三 平重盛……（平家物語）……二
四 謠曲……五十嵐力……三
五 羽衣……（觀世謠本）……四
六 入間川……（狂言記）……五一
七 馬方三吉……近松門左衞門……六〇
八 生命の冠……山本有三……六九
九 昭和時代……鶴見祐輔……九四
一〇 一茶文抄……小林一茶……一〇二

一一 日野山の閑居……鴨長明……一一三
一二 茶境……奥田正造……一二〇
一三 徒然草抄……吉田兼好……一二五
一四 俚諺論……大西祝……一三四
一五 かぐや姫……（竹取物語）……一四〇
一六 知と愛……西田幾多郎……一四七
一七 世界の四聖……高山樗牛……一五五

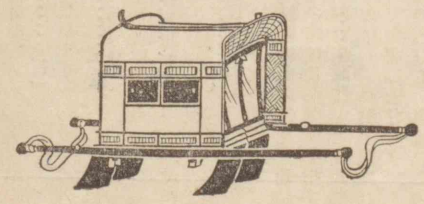
附錄　文學形態分類書目

一銀の猫

文治それの年八月十五日、鎌倉の大將殿、鶴ヶ岡の宮居に詣でさせ給ふ。例の事にて、御供仕うまつる人々、御前追ひ、御あとべ仕うまつれる、渚に遊ぶ蘆鶴のあゆみして、疾からず、遲からず、列を亂さずねり出でさせ給へるを、大路に膝折りふせ、畏みたいまつれる人數多あるに、お前拂ひしてあなとだにいはせず、世にいかめしく貴き御有樣なり。廣前を罷りて御手輿に召させ給ふほど、御階の忌垣のもとに畏りをる法師のあなるが、見上げ奉る面つき、なほ人ならずとおぼしけん、御輿ぞひの若侍して問はせ給ふ。ゆくりなきに驚きたるさまして、「雲水にありか定めず侍るものにて、名は圓位と申す。」といふ。聞召されて、「さればこそ聞知りたれ。穴熊のたけ

文治　後鳥羽天皇の御宇（一八四五―一八四九）こゝは文治二年。
鎌倉の大將殿　源頼朝。
廣前　神前をいふ。

手輿



忌垣　瑞籬ともいふ。神社のめぐりの垣なり。

き獲物の類ならで、賢き人得たるためしに、誘ひかへらん。わがあとに連れて來れ。」と召し連れさせ給へり。

御館に入らせられ、御裝束改めさせ給へば、やがておほとなぶらあまた照しかゞやかせ給ひて、御座近き處の一間なる簀子に召されたり。大將殿見おこせ給ひて、「昔藐姑射の山の宮仕せし人の、世をはかなきものに思ひなして、身は黑うやつれたれど、月花のなげきの譽は、物の心なき東人さへ聞知りたるぞ。弓取る人のもとの心の猛きには、よむ歌も直くあからさまと聞くはまことか。武士の荒々しき心には詠みうつし得まじきものに宮人達は沙汰し給へりとや。軍に出立ちて、笛・鼓の音、馬のいなゝき物とも思はぬを、この三十文字あまりの學びには心の後るゝはいかに。」「こは畏き御心にも思し惑はせ給ふものか。古の代々の帝は、馬に鞍おき、弓

なほ人　たゞびと。
雲水　行雲流水の如く、住居を定めずして、宗師を尋ね歩く僧。
穴熊の云々　史記に「西伯將ニ出獵ントスレ之。日、所レ獲非ル龍ニ、非レ彲ニ、非レ虎ニ、非レ羆ニ。所レ獲羆王之輔。於レ是西伯獵、果遇ニ太公於渭之陽ニ。」
おほとなぶら　大殿油の略。燈火の意に用ふ。
藐姑射の山の云々　藐姑射の山は仙洞御所を指す。西行法師はもと佐藤義清と稱し、鳥羽上皇に仕へて北面の士なりき。
物の心なし　風流の心のなきこと。

矢とらして、軍に立たせ給ひき。その御歌をよみ奉れば、猛くすくよかに、調もいと高しとこそ打聞き侍れ。いでや歌詠まんとては、益荒雄心をとり隠し、あてになよびかに詠みうつすべくするこそ、この道のいみじき煩なれ。君が御心のとくたけきまゝにうち詠ませ給はんには、今の人たれかは並びあへ奉らん。三尺の劍を執りて『大風起り、雲飛揚す。』とうたひ、槊を横たへて、『烏鵲南に』と詠ぜし君たちは、鞍の上にて文に遊ばせ給ふならずや。」と云ふ。「人々、あれ聞き給へ。世は捨てたれど頼もしき人の心ならずや。汝が遠つ祖の秀郷といひしは世にいみじき弓矢の上手となん聞ゆる。傳へたることもあるべし。かくこそと思ひしみぬることは忘れずてこそあらめ。こと一言にても教へ承るべし。」「こは益恐ある御問はせなり。つは者の道しばしも怠らせ給はぬ御心より、野山

あてになよびかに　高尚に優美に。

三尺の劍を云々　漢の高祖淮南王黥布を討伐しての歸途、その故郷沛を過ぎ、宗室・故人を召して宴を開き、酣にして自ら起つて大風の歌を歌へりと。歌に曰く、「大風起兮雲飛揚。威加二海内一兮歸二故郷一。安得二猛士一兮守二四方一。」

槊を横たへて云々　魏の曹操、詩思あり、鞍馬の間、往々槊を横たへて詩を賦す。その短歌に曰く、「月明星稀、烏鵲南飛。遶レ樹三匝、何レ枝可レ依。山不レ厭レ高、海不レ厭レ深。周公吐レ哺、天下歸レ心。」

秀郷　西行は俵藤太秀郷の九代の後裔。

をすみかの痩法師にさへ物問はせ給ふことの忝なさよ。向ひ奉りては、をこがましく家の傳なりなど聞え奉るべうも覺え侍らず。まして有り難き大宮仕を否み奉り、親のいつくしみをさへあだなるものにして、年僅かに二十三にて家を出でたるいたづらものの、弦ひき一つだに心に留めしことも侍らず。たゞ一言の忘れがたきは、『賞を重くし、罰を輕くせよ。』といひしと、『任ずる者を辱むれば危し。』といひしとのありがたさよ。士卒の疽を病めるを吮ひしは人の心をよく買ひなすと雖も、誠の情よりとも覺え侍らず。竈を減じて人を危きに落し入るゝは、將帥のさかしきにて、國を治め天の下をしるべき君の御心にあらず。軍を出し給へることの、あやしきまで賢くませるを、餘所ながら見聞き奉るには、この御問ゆるさせ給へ。」とて、額を板敷に擦りつけて申す。

二十三　保延六年に當る。

士卒の疽を病めるを云々　周の吳起の故事。史記に曰く、「卒有二病レ疽者一、起爲吮レ之。卒母聞而哭レ之。人曰、子卒也。而將軍自吮二其疽一、何哭爲。母曰、非然也。往年吳公吮二其父一。其父戰不レ旋レ踵、遂死二於敵一。吳公今又吮二其子一。妾不レ知二其死所一矣、以レ是哭也。」

竈を減じて云々　齊の孫臏の故事。史記に曰く、「孫臏使三齊軍　入二魏地一、造二十萬竈一。明日爲二五萬竈一、又明日爲二三萬竈一。龐涓行三日、大喜曰、我固知二齊軍怯一。入二吾地一三日、士卒亡者過レ半矣。乃棄二其步軍一、與二其輕銳一、倍レ日并レ行逐レ之。孫子度二其行一、暮當レ至二馬陵一。

君笑み誇らせ給ひ、「口とく心さとき法師なり。今宵は月見る夜ぞ。物語今は果してん。人々と土器とりはやし、曉かけて遊ばん。まれ人は酒飲まざるべし。鹿・猿のなかに立交りて歌詠めといふとも詠むまじ。たゞわが前に遊べ。風冷かなるにも飽かず飲み、物きたなげに食ひちらす人々は、暖かにもこそ。この火取、法師に参らせよ。」とて、白銀もて作りたる猫の形したるを、取傳へて、君より賜ふとて、前に置きたり。「鹿・猿は尚心たけし。鼠をだにえとらぬ痩法師が爲には、似つかはしき御賜ぞ。」とて、三度おしいたゞきぬ。

あした御暇賜はりて立ちいづるに、御館の人やどりに、誰が殿の童べならん、くゝり袴の裾、朝露に濡れそぼちて、いと寒げに居るを見て、「これ取らせん。火埋みて手足煖めよ。」とて、かのきら〳〵しき物を與へて、顧みもせず立去りぬ。童が主

馬陵道狹、而旁多二阻隘一、可レ伏レ兵。乃研二火樹一、白而書レ之曰、鹿消処二于此樹之下一。」

鹿・猿　關東の荒武者か譬へていふ。

火取　香爐の類。

くゝり袴　指貫の一種。

なる人、いとあやし。大將殿の法師に賜はせしを、いかで童に得させけん。」とて、まづ急ぎて聞え奉る。君うち笑み給ひ、「かの法師、あなづらはしくをさなげなる物くれしとて、腹だたしくや思ひけん、わが門の前に捨てゆきつるよ。法師とて、男だましひなくば修行もえせぬなるべし。されど家を出で、なほ才に誇りて、野山にまじり、歌詠みてのみあるは、世捨人の捨てらるべきあさましさぞかし。一度けがれし物、その童に取らせよ。」とて、取りおろさせ給ひぬ。

西行、後にこのことを人に語りていふ、右府はまことにね

挿絵　西行法師（菊池容齋筆、前賢故實より）

世捨人の云々　西行の歌に「世を捨つる人がまことに捨つるかは捨てぬ人こそ捨つるなりけれ」

ぢけたる君なり。口に蜜し給へど、心には針のおはするぞ。漢高の大度、曹孟德の智略あるに似て、天下の人皆この君の網の中に入れられたるは、神の冥福といふものを生れながら得させけん。たゞ悲しむべきは、神の御裔の、この後やう〳〵衰へさせ給はん世の姿なるは。」とて、涙とゞめ難くして物語りしとなん。心なき身にもこれを聞傳へては、秋の夕暮ならずも、うちひそみぬべし。（上田秋成―「藤簍冊子」）

首を回らせばむかしをかしや。世の春秋に交はりて、花には喜び、月には悲しみ、由無き七情の往來に泣きみ笑ひみ過ししが、思ひたちぬる墨染の衣を纏ひしより、今ははや指をかがなふれば、十餘り三とせに及びて秋も暮れたり。修行の年も漸く積りぬ。身もまた初老に近づきぬ。さすが心も澄渡りて、亂るゝことも少くなり、舊緣は漸く去り盡くして、胸に纏はる雲もなし。忽然として其の初一人來りし此の娑婆に、今は孑然として一人立つ。あら快の今の身よ。（幸田露伴）

漢高　漢の高祖劉邦のこと。隆準龍顏、寛仁大度、夙に大志あり、項羽と爭ひて天下を保つ。

曹孟德　魏の曹操のこと。兵を用ふること鬼神の如しといふ。

心なき身　西行の歌に、「心なき身にもあはれは知られけり鴫立澤の秋の夕暮」

上田秋成　國學者。大阪の人。攝津・京都に住す。鶉居と號す。文化六年歿、年七十六。（二三九四―二四六九）

藤簍冊子　秋成の歌文集。

七情　喜・怒・哀・懼・愛・惡・欲。

幸田露伴　名は成行。文學博士。

二　おどろのした

御門はじまり給ひてより八十二代に當りて、後鳥羽院と申すおはしましき。御諱は尊成、これは高倉院第四の御子、御母は七條院と申しき。治承四年七月十五日生れさせ給ふ。文治元年三月二十五日御年六つにて位に卽かせ給ひけり。

御門いとおよすげてかしこくおはしませば、法皇もいみじううつくしとおぼさる。文治二年十二月一日御書始（ふみはじめ）せさせ給ふ。御年七つなり。建久元年正月三日、御年十一にて御元服し給ふ。おなじき三年三月十三日に法皇崩れさせ給ひし後は、御門ひとへに世を知ろしめして、四方の海波靜かに、吹く風も枝を鳴らさず、世治り民安くして、あまねき御うつくしびの涙、秋津島の外まで流れ、繁き御惠、筑波山の陰よりも

高倉
- 安（一）德（母建禮門院）
- 守貞親王（二）（母七條院）
- 惟明親王（三）
- 後鳥羽（四）（母七條院）

七條院　藤原殖子。修理大夫信隆の女。高倉天皇の妃。

治承四年　紀元一八四〇年

文治元年　紀元一八四五年

およすげ　年よりもませてあること。

法皇　後白河法皇。

うつくし　可愛きこと。

書始　童子の始めて書物を讀む儀式。

建久元年　紀元一八五〇年

うつくしび　慈愛。

深し。よろづの道々に明らけくおはしませば、國に才ある人多く、昔に恥ぢぬ御代にぞありける。中にも敷島の道なむすぐれさせ給ひける。御歌かず知らず人の口にある中にも、

奥山のおどろのしたもふみわけて道ある世ぞと人に知らせむ

と侍るこそ、まつりごと大事と思されけるほど著く聞えて、いといみじく、やむごとなくは侍れ。

建久九年正月十一日、第一の御子四つになり給ふに、御位譲り申させ給ひておりゐ給ふ。御年十九。位におはします事十四年なりき。今日明日二十ばかりの御齢にて、いとまだしかるべき御事なれども、よろづところせき御ありさまより、はなか〳〵やすらかに、御幸など御心のまゝならむとにや。世を知ろしめす事は今もかはらねば、いとめでたし。

敷島の道　和歌の道。

おどろ　雜草・荊棘などのむらがり生ぜる處。

やむごとなし　貴し。

第一の御子　土御門天皇。

まだしかるべき　未だ御譲位し給ふ御壽にあらざるをいふ。

ところせき　窮屈なるさま

鳥羽殿・白河殿なども修理せさせ給ひて、常に渡り住ませ給へど、猶また水無瀬といふ處に、えもいはずおもしろき院づくりして、しば〳〵通ひおはしましつゝ、春秋の花・紅葉につけても、御心ゆくかぎり世をひゞかして、遊をのみぞし給ふ。處がらも、はる〴〵と川に臨める眺望、いと面白くなむ。元久の頃、詩に歌を合はせられしも、とりわきてこそは。

見わたせば山もとかすむみなせ川ゆふべは秋となに思ひけむ

萱葺の廊・渡殿など、はる〴〵と艶にをかしうせさせ給へり。御前の山より瀧おとされたる石のたゝずまひ、苔深き深山木に枝さしかはしたる庭の小松も、げに〳〵千世をこめたる霞の洞なり。前栽つくろはせ給へる頃、人々あまた召して御遊などありける後、定家の中納言いまだ下臈なりける

白河殿　山城國愛宕郡にありし離宮。

水無瀬　攝津國三島郡島本村大字廣瀬。

心ゆくかぎり　思ふ存分に。

世をひゞかして　世人を驚かす意。

元久の頃　土御門天皇の御宇（一八六四―一八六六）

廊・渡殿　本殿より釣殿・泉殿・對の屋等に通ずる廊をいふ。

霞の洞　仙人の栖處。轉じて、上皇の御所に申す。

定家　藤原俊成の子。新古今・新勅撰集の撰者。仁治二年歿、年八十。（一八二二―一九〇一）。「見渡せば花ももみぢもなかりけり浦の苫屋の秋の夕暮」

下臈　官位の低きもの。

時に奉られける、

あり經けむ本の千年にふりもせでわが君ちぎるみねのわか松

君が世にせきいるゝ庭をゆく水の岩こす數は千世も見えけり

今の攝政は院の御時の關白基通のおとゞ、その後は後京極殿と聞え給ひし、いと久しくおはしき。このおとゞはいみじき歌の聖にて、院の上おなじ御心に和歌の道をぞ申し行はせ給ひける。文治の頃千載集ありしかど、院いまだきびはにおはしましかばにや、御製も見えざめるを、當帝位の御ほどに、また集めさせ給ふ。土御門の内のおとゞの二郎君右衞門督通具といふ人を始にて、有家の三位、定家の中將、家隆・雅經などに宣はせて、昔より今までの歌をひろく集めらる。

基通　近衞基實の子。
後京極殿　藤原良經。九條兼實の子。博く衆藝に通じ、最も和歌に長ず。攝政太政大臣に至る。建永元年歿、年三十八。（一八二九―一八六六）
「人住まぬ不破の關屋の板廂荒れにし後はたゞ秋の風」
文治の頃　文治三年（一八四七）藤原俊成、千載和歌集を撰す。
きびは　幼少なること。
土御門の内のおとゞ　源通親。
通具　正二位大納言に至る
「言の葉のうつりし秋も過ぎぬればわがみ時雨とふる涙かな」
有家　藤原重家の子。從三位に叙せらる。
「岩が根の床に嵐をかたしきてひとりやねなむ小夜の中山」

おの〳〵奉れる歌を、院の御前にて自らみがきといのへさせ給ふさま、いと珍らしく面白し。この時も、先に聞えつる攝政殿とりもちて行はせ給ふ。

この撰集より先に、千五百番の歌合せさせ給ひしにも、勝れたる限りを撰ばせ給ひて、その道の聖達判じけるに、やがて院も加はらせ給ひながら、猶このなみには立ちおよび難しと卑下せさせ給ひて、判のことばを記されず、御歌にて勝り劣れる志ばかりをあらはし給へり。なか〳〵いと艶に侍りけり。上のその道をえ給へれば、下も自ら時を知るならひにや、男も女も、この御代にあたりてよき歌よみ多く聞え侍りし中に、宮内卿の君といひしは、村上の御門の御後に、俊房の左のおとゞと聞えし人の御末なれば、はやうはあて人なれど、つかさ淺くてうちつゞき四位ばかりにて失せにし

藤原家隆　一代の詠歌六萬首に上る。宮内卿に任ぜらる。嘉禎三年歿、年八十。（一八一八―一八九七）
「いかにせむ來ぬ夜あまたの時鳥待たじと思へば村雨のそら」
雅經　藤原頼經の子。參議に至る、家を飛鳥井と稱す。承久三年歿、年五十二（一八三〇―一八八一）。
「みよしのの山の秋風さよふけてふる郷さむく衣うつなり」
この撰集　新古今和歌集。
千五百番歌合　仙洞百番歌合ともいふ。二十卷あり。
なみ　列。同じ列。
判のことば　批評の言葉。
宮内卿　後鳥羽天皇の宮女。巨勢師光の女。書文をよくす。
「花さそふ比良の山風ふきにけり漕ぎゆく舟のあと見ゆるまで」
俊房　村上天皇の皇子、具平親王の孫。
はやうは　以前は。
あて人　貴人。
失せにし人　右京大夫源師光。

人の子なり。まだいと若きよはひにて、そこひもなく深き心ばへをのみよみしこそ、いと有り難く侍りけれ。この千五百番の歌合せの時、院の上宣ふやう、「こたみは皆世にゆりたる古き道のものどもなり。宮内卿はまだしかるべけれども、けしうはあらずと見ゆめればなむ、かまへてまろが面おこすばかりよき歌仕うまつれ。」と仰せらるゝに、面うち赤めて、涙ぐみて候ひけるけしき、限りなきすきのほどもあはれにぞ見えける。さてその百首の歌、いづれもとり〴〵なる中に、

うすくこき野邊のみどりの若草に跡まで見ゆる雪のむらぎえ

草の緑の濃き薄き色にて、去年のふる雪の遲く疾く消えけるほどをおし量りたる心ばへなど、まだしからむ人はいと思ひより難くや。この人、年積るまであらましかばげにいか

そこひもなく　際限もなく。
ゆりたる　名人として許されたる。
けしうはあらず　悪くはあらず。
かまへて　氣をつけて。
面おこす　面目を立つ。

ばかり目に見えぬ鬼神をも動かしなましに、若くて失せにし、いとといとほしく、あたらしくなむ。

かくて、この度撰ばれたるをば、新古今といふなり。元久二年三月二十六日、竟宴といふこと、春日殿にて行はせ給ふ。いみじき世のひゞきなり。かの延喜の昔おぼしよそへられて、院の御製、

石の上ふるきを今にならべこし昔のあとをまたたづねつゝ

攝政殿、

敷島ややまとことばの海にして拾ひし玉はみがかれにけり

次々ずん流るめりしかど、さのみはうるさくてなむ。

かくて、院の上は、ともすれば水無瀬殿にのみ渡らせ給ひ

目に目えぬ云々　「力をも入れずして、天地を動かし、目に見えぬ鬼神をもあはれと思はせ、猛き武士の心をも慰むるは歌なり」（古今集序）
あたらし　惜し。
竟宴　勅撰集や書物の進講終りたる時に催す祝宴。
春日殿　一條通の北にあり。
延喜の昔　醍醐天皇の延喜五年。古今集の撰ばれし時をいふ。
おぼしよそへられて　思ひあはせられて。
石の上　「ふるき」にかゝる枕詞。
攝政　藤原良經。
ずん流る　順流るにして、次々に言ひ出す意。

て、琴笛の音につけ、花紅葉のをり〳〵にふれて、よろづの遊びわざをのみ盡くしつゝ、御心ゆくさまにて過させ給ふ。誠によろづ世もつきすまじき御世の榮、次々今よりいと賴もしげにぞ見えさせ給ふ。御碁うたせ給ふついでに、若き殿上人ども召して、これかれ心のひき〳〵に挑み爭はせさせ給へば、あるは小弓、雙六などいふ事まで、思ひ〳〵に勝負をさうどきあへるも、いとをかしう御覽じて、さま〴〵の興ある賭物どもとうでさせ給ふとて、なにがしの中將を御使にて、修明門院の御方へ、「何にても、をのこどもに賜はすべき賭物」と申させ給ひたるに、とりあへず、小さき唐櫃の金物したるが、いと重やかなるを參らせられたり。この御使の人、何ならむといといぶかしくて、かたはしほのあけて見るに、錢なり。いと心得ずなりて、さと面うち赤めて、あさましと思へる氣

殿上人　清涼殿の殿上の間に伺候することを許されし人々にいふ。四位・五位、並に六位の藏人。
ひき　心の好む方。
さうどき　爭ひ騷ぐ意。
とうで　「取出て」の音便。
修明門院　藤原重子。順德天皇の御母。

色しるきを、院御覽じおこせて、「朝臣こそむげに口惜しくはありけれ。かばかりの事知らぬやうやはある。古より殿上の賭弓といふ事には、これをこそ賭物にはせしか。されば今賭物と聞えたるに、これをしもいだされたるなむ、古の事知り給へるこそいたきわざなれ。」とほゝゑみて宣ふに、さは惡しく思ひけりと、心地騷ぎておぼゆべし。

大方この院の上は、よろづの事にいたり深く、御心も花やかに、物に委しうぞおはしましける。

夏の頃、水無瀨殿の釣殿にいでさせ給ひて氷水めして、水飯やうのものなど、わかき上達部、殿上人どもにたまはせて、大御酒まゐるついでにも、「あはれ古の紫式部こそはいみじくはありけれ。かの源氏物語にも、『ちかき川の香魚、西川より奉れる石伏やうのもの御前にて調じて。』と書けるなむ、勝れ

いたきわざ　俗に「えらいこと」といふに同じ。
上達部　三位以上の人々。但し參議は四位なるもこの内に入る。
大御酒　酒のこと。大も御も美稱なり。
紫式部　藤原爲時の女。實名は傳はらず。源氏物語の作者。
源氏物語　五十四帖。光源氏君父子を中心にして、當時の上流社會の有樣を寫したる小說。この事は常夏の卷に見ゆ。
西川　桂川をいふ。
石伏　川魚の一種。

てめでたきぞとよ。只今さやうの料理仕りてむや。」など宣ふを、秦のなにがしとかいふ御隨身、勾欄のもと近く候ひけるが、うけたまはりて、池の汀なる小笹を少ししきて、白き米を洗ひて奉れり。「ひろはば消えなむとにや。これもけしかるわざかな。」とて、御衣脱ぎてかづけさせ給ふ。御土器たび〳〵聞しめす。何事もめでたく見えさせ給ふ御ありさま、千歳をふとも飽く世あるまじかめり。（增鏡による）

稲葉ふく風にまかせて住む庵は月ぞまことにもり明しける　（俊成女）

道もなき庭の淺茅にむすぼほれ露のそこなる松蟲のこゑ　（式子内親王）

思ひきや花も我が身もおくれ居てありしむかしを忍ぶべしとは　（二條院讃岐）

御隨身　身分ある人に官より付けらるゝ護衛の役。
ひろはば云々　源氏物語帚木の卷に「ひろはば消えなむと見ゆる玉笹の上の霰」云々。
けしかるわざ　變つたことの意にして、ほめたる言葉。
かづく　衣を賜ふこと。
增鏡　十卷。後鳥羽天皇の御誕生より後醍醐天皇の御代まで百五十年間のことを記したる歴史。作者未詳。
俊成女　藤原俊成の女。
式子内親王　後白河天皇第三皇女。
讃岐　源三位頼政の女。或はいふ孫と。

三　平重盛

太政の入道はかやうに人々數多縛め置きても、なほ心ゆかずや思はれけん、既に赤地の錦の直垂に、黑絲縅の腹卷の白金物打つたる胸板せめ、先年安藝守たりし時、神拜のついでに靈夢を蒙つて、嚴島大明神より現に賜はられたりける銀の蛭卷したる小長刀、常の枕を放たず立てられたりしを脇に挾み、中門の廊にぞ出でられたる。大方その氣色ゆゝしうぞ見えし。「貞能。」と召す。

筑後守貞能は木蘭地の直垂に緋縅の鎧著て、御前に畏まつてぞ候ひける。入道宣ひけるは、「いかに貞能、この事いかゞ思ふぞ。保元に平右馬助をはじめとして、一門半ば過ぎて新院の御方に參りにき。一宮の御事は故刑部卿殿の養君にて

太政入道　太政大臣平清盛入道淨海。
腹卷　鎧の一種。腹に卷きて脊にて合はす。
胸板せめ　鎧の胸板をひしと胸につけて著たるなり。
蛭卷　蛭の卷きつきたる如くに、籐・銀などにて、間をすかして卷くなり。
木蘭地　黄・紅・赤の混じたる色。
保元　後白河天皇の御代。（一八一六―一八一八）
平右馬助　清盛の叔父忠正。
新院　崇德上皇。
一宮　崇德上皇の皇子重仁親王。
故刑部卿　清盛の父忠盛。

ましく、しかば、旁見放ち参らせ難かりしかども、故院の御遺誡に任せて、御方にて先をかけたりき。これ一つの奉公。次に平治元年十二月、信頼・義朝が謀叛の時、院・内を取り奉つて大内に立て籠り、天下暗闇となりたりしにも、入道隨分身を捨てて兇徒を追ひ落し、經宗・惟方をめし縛めしに至るまで、君の御爲にすでに命を失はんとする事度々に及ぶ。されば人何と申すとも、いかでかこの一門をば七代までは思し召し棄てさせ給ふべき。それに成親といふ無用のいたづら者、西光と申す下賤の不當人が申すことに君のつかせ給ひて、動もすればこの一門滅さるべき由の御結構こそ然るべからね。この後も讒奏する者あらば、當家追討の院宣を下されつと覺ゆるぞ。朝敵となつて後はいかに悔ゆとも益あるまじ。暫く世を鎭めん程、法皇をば鳥羽の北殿へ移し参らする

故院　鳥羽法皇。
平治　二條天皇の御代。（一八一九―一八二〇）
信頼　藤原信頼。
義朝　源義朝。
院・内　後白河上皇と二條天皇。
經宗　藤原經宗。
惟方　藤原惟方。
成親　藤原成親。
西光　藤原師光。入道して西光といふ。
不當人　道理にはづれし行をなす者。
法皇　後白河法皇。
鳥羽の北殿　京都の南郊鳥羽にありし、所謂城南離宮。

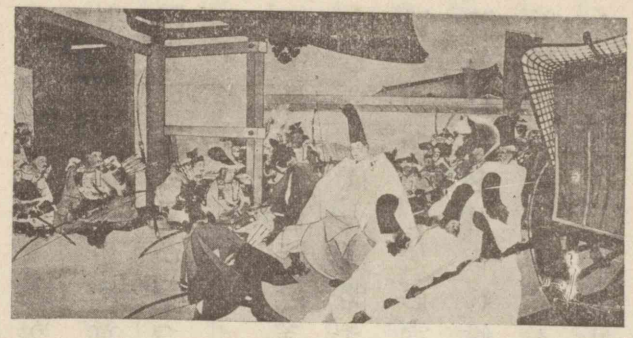
か、然らずばこれへまれ、御幸をなし参らせんと思ふはいかに。その儀ならば、定めて北面の者どもが中より、矢をも一つ射んずらん。その用意せよと侍どもに觸るべし。大方は入道、院方の奉公思ひ切つたり。馬に鞍おかせよ。著脊長取出せ。」とこそ宣ひけれ。

主馬判官盛國急ぎ小松殿へ馳せ参つて、「世は早、かう候。」と申しければ、大臣聞きもあへ給はず、「嗚呼、はや成親卿の首の刎ねられたんな。」と宣へば、「その儀にては候はねど、入道殿の御著脊長を召され候上は、侍どもも皆打立つて、只今院の御所法住寺殿へ寄せんとこそ出で立ち候ひつれ。暫く世を鎭めんほど、法皇をば鳥羽の北殿へ遷し参らするか、然らずばこれへまれ、御幸をなし参らせんとは候へども、内々は鎭西の方へ流し参らせんとこそ議せられ候ひつれ。」と申しけれ

著脊長　大將の鎧をいふ。
小松殿　平重盛の邸。

ば、大臣、何によりて只今さることのおはすべきとは思はれけれども、今朝の禪門の氣色、さる物狂ほしき事もやおはすらんとて、急ぎ車を飛ばせて西八條殿へぞおはしたる。

門前にて車より下り、門の内へさし入りて見給ふに、入道腹卷を著給ふ上、一門の卿相雲客數十人、各〻色々の直垂に、思ひ〳〵の鎧著て、中門の廊に二行に著座せられたり。その外、諸國の受領・衛府・諸司などは縁に居こぼれ、庭にもひしと並み居たり。旗竿など引側め引側め、馬のはるびを固め、冑の緒を締め、只今皆打立たんずる氣色どもなるに、小松殿、烏帽子・直衣に



西八條殿　清盛の邸。

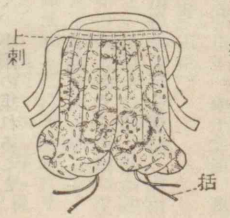
挿絵　重盛諫言圖（高橋廣湖筆）

はるび　腹帶。

大紋の指貫のそば取つて、さやめき入り給へば、事の外にぞ見えられける。

入道伏目になつて、あはれ例の内府が世をへうするやうにふるまふものかな。大に諫めばやと思はれけれども、さすが子ながらも、内には五戒を保つて慈悲を先とし、外には五常を亂らず禮儀を正しうし給ふ人なれば、あの姿に腹卷を著て向はんこと、さすが面はゆう恥かしうや思はれけん、障子を少し引立て、腹卷の上に素絹の衣をあわて著に著給ひたりけるが、胸板の金物のすこし外れて見えけるを隱さんと、頻りに衣の胸を引違へ引違へぞし給ひける。大臣は舍弟宗盛卿の座上に著き給ふ。入道宣ひ出さるゝこともなく、大臣もまた申し上げらるゝ旨もなし。

やゝあつて入道宣ひけるは、「あの成親卿が謀叛は事の數



指貫　裾を括る袴。その端を取つてさわ〳〵と音たてて歩めるなり。

五戒　不殺生・不偸盜・不邪淫・不妄語・不飲酒。

五常　仁・義・禮・智・信。

にも候はず。一向法皇の御結構にて候ひけるぞや。暫く世を鎭めん程、法皇をば鳥羽の北殿へ遷し參らするか、然らずばこれへまれ、御幸をなし參らせんと思ふはいかに。」と宣へば、大臣聞きもあへ給はず、はら〳〵とぞ泣かれける。入道、「さていかにや、いかに。」と呆れ給へば、稍あつて大臣涙を抑へて、「この仰承り候に、御運ははや末になりぬと覺え候。人の運命の傾かんとては、必ず惡事を思ひ立ち候なり。又御有樣を見參らせ候に、更に現とも覺えず候。さすが我が朝は邊地粟散の境とは申し乍ら、天照大神の御子孫、國の主として、天兒屋根命の御末、朝の政を掌らせ給ひしよりこの方、太政太臣の官に至る人の、甲冑をよろふこと禮儀を背くに非ずや。就中御出家の御身なるに、法衣を脱ぎ捨てて忽ちに甲冑を鎧ひ弓箭を帶しましまさんこと、内には破戒無慙の罪を招くのみならず、外には仁義禮智信の法にも背き候ひなんず。旁〻恐ある申事にて候へども、心の底に旨趣を殘すべきにも候はず。まづ世に四恩候。天地の恩、國王の恩、父母の恩、衆生の恩これなり。その中に最も重きは朝恩なり。普天の下王地に非ずといふことなし。されば、かの潁川の水に耳を洗ひ、首陽山に蕨を折りし賢人も、勅命の背き難き禮儀をば存知すとこそ承れ。いかに況や、先祖にも未だ聞かざりし太政大臣を極めさせ給ふ。いはゆる重盛が無才愚暗の身を以て蓮府・槐門の位に至る。加之、國郡半ばは一門の所領となつて、田園悉く一家の進止たり。これ希代の朝恩に非ずや。今これ等の莫大の御恩を思し召し忘れさせ給ひて、紊りがはしく法皇を傾け參らせ給はん事、天照大神・正八幡宮の神慮にも背かせ給ひ候ひなんず。それ日本は神國なり。神は非禮を受け給ふ可から

邊地粟散　かたよれる地にて、小國の集れること。

普天の下云々　詩經の小雅北山篇に、「溥天之下、莫レ非二王土一。率土之濱、莫レ非二王臣一。」

潁川の水に耳を洗ひ　許由といふ隱士の話。堯が許由の大人物なるを知つて天下を讓らんとせしに、由は聞くだに耳汚れたりとて、潁川の水に耳を洗へりと。

首陽山に蕨を折りし　伯夷・叔齊の兄弟、周の武王の殷を討つを諫めて聽かれず、殷の亡びし後、周の粟を食ふを義とせずして、首陽山に隱れて、蕨を折つて食ひ、遂に餓死せりと。

蓮府・槐門　共に大臣を稱することば。蓮府は、南史に「王儉といふ宰相、その邸に芙蓉を植う。時人よりて之を蓮花池といへり」と。槐門は、もと周の世、朝廷に三槐を植ゑ、三公これに面して坐したりといふ。よりて三公の異稱とす。

ず。しかれば君の思し召し立たせ給ふ所、道理半ばなきに非ず。中にもこの一門が、代々の朝敵を平げて、四海の逆浪を鎭めし事は無雙の忠なれども、その賞に誇る事は傍若無人とも申しつべし。然れども當家の運命未だ盡きざるによりて、事既に露はれ候ひぬ。その上仰せ合はせらるゝ成親卿を召置かれぬる上は、假令君いかなる不思議を思し召し立たせ給ふとも、何の恐か候べき。所當の罪科行はれぬる上は、退いて事の由を陳じ申させて、君の御爲には愈〻奉公の忠勤を盡くし、民の爲には益〻撫育の哀憐を致させ給はば、神明の加護に預つて、佛陀の冥慮に背くべからず。神明・佛陀感應あらば、君も思し召し直す事、などか候はざるべき。

これ、尤も君の御理にて候へば、かなはざらんまでも、院中を守護し參らせ候べし。その故は、重盛はじめ敍爵より今

大臣大將に至るまで、しかしながら君の御恩ならずといふことなし。この恩の重きことを思へば、千顆萬顆の玉にも超え、その恩の深き色を案ずれば、一入再入の紅にもなほ過ぎたらん。然らば院中に參り籠り候べし。悲しきかな、君の御爲に奉公の忠を致さんとすれば、迷廬八萬の項よりもなほ高き父の恩、忽ちに忘れんとす。痛ましきかな、不孝の罪を逃れんとすれば、君の御爲にはすでに不忠の逆臣ともなりぬべし。進退これ谷れり。是非いかにも辨へ難し。申し受くる所詮は、たゞ重盛が首を召され候へ。その故は、院參の御供をも仕るべからず、又院中をも守護し參らすべからず。富貴といひ、榮華といひ、朝恩と申し、重職といひ、旁〻極めさせ給ひぬれば、御運の盡きんこと難かるべきに非ず。『富貴の家には祿位重疊せり。再び實なる木はその根必ず傷む。』と見えて候。心細く

千顆萬顆の玉　和漢朗詠集に菅三品の「螢レ日螢レ風、高低千顆萬顆之玉。染レ枝染レ波、表裏一入再入之紅」

迷廬八萬　迷廬は蘇迷廬の略、一に須彌山といふ。妙高山と譯す。佛經にいふ極めて高き山。

こそ候へ。いつまでか命生きて、亂れん世をも見候べき。たゞ末代に生を受けて、かゝる憂き目にあひ候重盛が果報の程こそ拙う候へ。只今も侍一人に仰せ付けられ、御壺の内へ引出されて、重盛が頭を刎ねられんずることは、いと易き程の御事にてこそ候はんずらめ。これを各〻聞き給へ。」とて、直衣の袖も絞るばかりにかきくどき、さめ〴〵と泣き給へば、その座に竝み居給へる平家一門の人々、皆袖をぞぬらされける。

入道、頼みきつたる内府はかやうにのたまふ、世にも力なげにて、「いや〳〵それまでの事は思ひも寄りさうず。惡黨どもの申す事に君のつかせ給ひて、いかなるひがごとなどもや出で來んずらんと思ふばかりにてこそ候へ。」大臣「たとひいかなるひがごと出で來候へばとて、君をば何とかし參らせたまふべき。」とて、つい立つて中門に出で、侍どもにのたまひけるは、「只今これにて申しつる事どもをば、汝等はよく承らずや。今朝よりこれに候ひて、かやうの事どもを申ししづめんとは存じつれども、あまりにひたさわぎに見えつる間、先づ歸りつるなり。院參の御供においては重盛が頭の刎ねられたらんを見て仕れ、されば人參れ。」とて、小松殿へぞ歸られける。（平家物語による）

昔は天子爭臣七人あり。無道と雖も天下を失はず。
諸侯爭臣五人あり。無道と雖も其の國を失はず。
大夫爭臣三人あり。無道と雖も其の家を失はず。
士爭友あれば、則ち身令名を離れず。
父爭子あれば、則ち不義に陷らず。

（孝經）

さうず 候はず。

平家物語 全十二卷。附錄一卷より成る。作者不詳。

背者天子有二爭臣七人一。雖レ無道一不レ失二天下一。諸侯有二爭臣五人一。雖レ無道一不レ失二其國一。大夫有二爭臣三人一。雖レ無道一不レ失二其家一。士有レ爭友一。則身不レ離二於令名一。父有レ爭子一。則不レ陷二於不義一。

孝經 一卷。孔子と曾子と孝を論じて門弟に筆記せしめしもの。十三經の一。

四 謠曲

時代の精神を最もよく現した文學は、大抵の場合、その時代の最もよき文學である。謠曲は室町時代の思潮を最もよく代表した文學で、同時にこの時代の最もすぐれた文學である。

今川貞世の「鹿苑院准后嚴島詣記」に、能樂の最初の保護者たる足利義滿が嚴島詣の折の好みの服裝を寫して、

昔も嚴島には高倉院御幸なり、平のおほきおほいまうち君も度々詣でられし例も侍りけめども、此の度は引きかへて珍らしき御姿どもにて、縹色に目結ひとかやいふ紋を染めて、袖口細く裙ひろき打掛といふものを、同じ姿に著給ふ。赤き帶に、青色の脛巾、赤色の短き袴なり。御供の人人皆みさきばかりなる金刀ども差させらる。傍の人は誹り侍りけめども、かやうの事は強ちに法も式も定まらず、たゞ時代に從ふことぞかし。

格式のやかましい世の中に、將軍の身を以て狂言まがひの赤裝束は奇拔過ぎる。世間の陰口も多かつたであらう。併しながら、彼は世間に拘らず自家の趣味を發揮する勇氣を持つて居た。天授年中、今熊野の猿樂に觀阿彌清次を見出し、破格の待遇を敢へてして能樂の創立に骨折らせ、次いで世阿彌元清に殊寵を加へて新藝術の大成に一生を獻げしめた。彼はまた狂言師を引立てて、狂言をば能樂に伴なふべき立派な藝術たらしめた。かくして從來趣味の低い民衆に弄ばれた幼稚な雜藝は、彼の誘導奬勵の下に統べ合はせ磨き上げられて、立派な藝術となつたのである。彼に次いでこの

謠曲 能樂に用ふる歌詞。能樂は神事に際して舞樂を奏し神慮を慰むる風習より起り、平安朝の頃には茶番狂言の如きものとなる。之を猿樂といへり。鎌倉時代の初期にはこの技を專業とするものあり。室町時代に至りて觀世流の猿樂師結崎清次・元清の父子、將軍に寵せられて詞曲・曲節・舞方を一定し、之を將軍家の式樂となせり。觀世・寶生・金春・金剛・喜多の諸流あり。その曲目の今日に行はるゝもの約二百番は、皆室町時代の作に係る。

今川貞世 剃髮して了俊と稱す。上總介範國の二子。鎭西探題たり。著書多し。應永二十七年歿、年九十六。（一九八五—二〇八〇）

鹿苑院准后嚴島詣記 一卷。元中六年三月、今川貞世が足利義滿に侍して嚴島に詣でし時の日記。

平のおほきおほいまうち君 太政大臣平清盛。

觀阿彌清次 觀世流猿樂師の祖。足利氏に從ひ、大和結崎を領す、應永十三年歿す、年五十二。（一三〇一五—一三〇六六）

世阿彌元清 觀世清次の長子。足利義滿・義敎に仕ふ。能樂の大成者。その作品には八幡・相生・養老・老松・鹽釜・蟻通・箱崎・鵜羽・盲打・松風・村雨・百萬・檜垣女・薩摩守・實盛・賴政・清經・敦盛・空也・逢坂・戀の重荷・佐野の船橋・泰山府君の二十二曲の他に、その作と傳へらるゝもの七十餘曲あり。康正元年歿、年八十一。（一三〇三五—一三一一五）

新藝術の興隆に與つて力のあつたのは足利義政である。彼の鑑賞眼は流石に高くて、その止むに止まれぬ藝術癖は年と共に募つて來た。その晩年、天下は亂れて朝儀も廢せられ、節會も行はれない時に當つても、猿樂だけは曾て止めたことが無かつた。かやうな間に養はれた趣味が本となつて、謠曲も茶器も雪舟の畫も出來たのである。

武家の天下であつた室町時代は、武士道を本位とし、簡素を主としたことは、大體鎌倉時代の思想を受繼いで居たが、その特色は鎌倉思想と平安朝思想とを調和した所にある。打續いた戰亂が漸く治るに及んで、だん〳〵に鎌倉式の

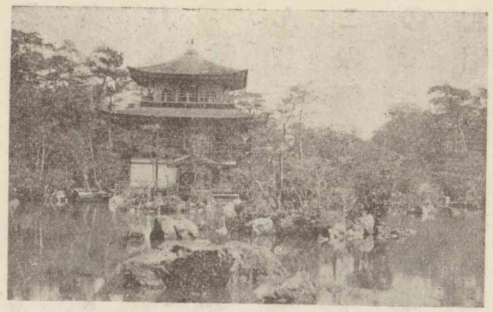
足利義政 足利六代將軍義教の子。延德二年歿す、年五十六。（二〇九五—二一五〇）東山に銀閣寺を建て逸樂をつくせり。これが爲に東山時代と稱する美術工藝の盛時をなせり。

狂言 能樂の幕間に演ずる滑稽を主とする劇。之に大蔵・鷺・和泉の三流あり。第六課入間川參照。

挿繪 夏景山水圖（雪舟筆）。

雪舟 畫僧。北宗畫雪舟流の祖。永正三年歿、年八十七。（二〇八〇—二一六六）

樸實に過ぎて雅致に乏しいのが厭になり、平安朝文藝の優美で彫琢を極めたのが懷かしくなつて來た。鎌倉武士が治世・修身・安心立命の要具として眞面目に歸依した禪宗を、室町時代には茶味・禪味などといつて、我が言行に寂び・床しみを添へる一種の光澤出し道具として取扱ふ傾向を生じて來た。かくして此の時代は、一種の華美な趣味を發揮して來たが、それは普通の華美、平安朝の如き華美ではなくて、鎌倉式の樸實に燻しをかけた華美であつた。試みに鎌倉の圓覺寺・建長寺を見て後に、京都の金閣寺・銀閣寺を見れば、此の趣味の相違が解ると思ふ。茶器にも、雪舟・雪村の繪にも、能にも、謠曲にも、皆この室町趣味



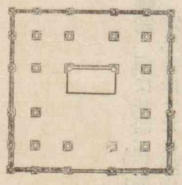
禪宗 禪は梵語、禪那（トヲヤナイ）の略。定思惟修または靜慮と譯す。眞理を思惟し、念慮を安靜にして、心を治するの謂なり。禪宗はまた佛心宗ともいひ、教外別傳・不立文字をもつて、その宗要となす。

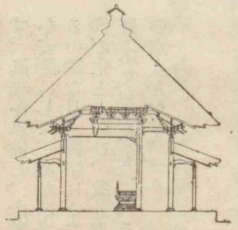
挿繪 銀閣寺。

雪村 畫僧。常陸の人。周文・雪舟の畫風にならひ、一家をなす。文明十六年生、歿年不詳。（二一四四—）

が溢れて居る。吾等は、この華麗と簡樸との相反した二要素の奇しき調和に、寂びといふ不思議な美が成立つたもので、そしてこれが此の時代の中心趣味であると思ふが、當時の文學中、此の趣味を最もよく現したものは謠曲である。

當時の武士は簡易な生活に甘んじて居た。茶の湯なども本來はこの簡易な生活の標章であつたのであらう。四疊半の小座敷に數人相會して狹しともせず、木の葉で染めた麁服を纏ひ、簡單な御馳走に安んじて光風霽月の心地を樂しむといふが如きは、此の時代でなくては發明せられぬことである。彼等はかやうに簡易な生活に安んじた





挿繪　圓覺寺舍利殿。（脚註―右は斷面圖、左は平面圖）

が、文藝の方面において憧るゝ所は、前代の艶麗な文學や、漢土の立派な文章などであつた。御伽草子などには、田舍少女の身嗜みに萬葉・古今・伊勢・源氏・狹衣を讀破したなどいふことがあり、阿漕の浦の魚屋が源氏物語を說くなどいふことが述べてあるが、當時相應の學者でさへ容易に讀めなかつた萬葉集や源氏物語が、田舍少女や魚屋や普通の武士などに讀めよう筈がない。これは畢竟嚙みこなせぬ古文學に對する時人の憧憬心を裏面から證明したものである。彼等はかやうに和漢の古文學を崇拜した。併しながら文學の衰へた世の中とて、容易にこれを理解することすらも出來なかつた。ましてこれに對抗すべき新作を出すなどいふことは及びもつかぬことであつた。かくして彼等の力に叶ふことで、彼等の理想に近い仕事は、古文學の名文句を集め、これに

御伽草子　室町時代より德川時代初期までに、婦人・子供の讀物として作られたる小說の概稱。これ等を集錄したるものに「御伽草子」と「新編御伽草子」とあり。前者には「文正草子」「鉢かづき」「小野小町」「御曹子島渡り」「唐絲草子」「木幡ぎつれ」「七草草子」「猿源氏草子」「物臭太郎」「さゞれ石」「蛤の草子」「小敦盛」「二十四孝」「梵天國」「のせざる草子」「猫の草子」「濱出草子」「和泉式部」「一寸法師」「佐伯」「浦島太郎」「橫笛草子」「酒呑童子」の二十三種を收め、後者には「福富草子」「十番の物爭」「音なし草子」「若草」「かざしの姫君」「常盤の嫗」「小おちくぼ」「今宵の少將」「毘沙門の本地」「貴船の本地」「淨瑠璃十二段草子」「つき島」「化物草子」「魚鳥平家」「狐の草子」「こうろぎ草子」「玉蟲の草子」「柿本の系圖」「立烏

繼ぎはぎの意匠を施して纏めることであつた。此の骨折の結果として、謠曲といふ繼ぎはぎ文學、綴錦文學が起つたのである。

繼ぎはぎは獨り謠曲の特色であるばかりでなく、當時の文學の殆ど全體に通じた特色であつた。例へば御伽草子の如きは、思想・文章の兩面に通じて適不適をば問はず、唯美ならんことをのみこれ求めた。美なる事物、美なる文句の寄せ木細工であつて、その不自然・背實・矛盾に心づかなかつた。しかも謠曲はその集美補綴の方式を最も濃厚に、最も激しく用ひて居りながら、他の同臭味の文學に比すれば、その長所のみを採つて短所を分け前せぬ傾向が見える。源氏物語・伊勢物語・古今和歌集・平家物語・和漢朗詠集・白氏文集佛典などの名文句が綴り合はされて、不思議にもそこに一種の寂び

帽子」「尤の草子」の二十種を收めたり。

阿濃の浦 三重縣安濃郡と一志郡とに亙れる海濱。

白氏文集 唐の詩人白樂天の詩文集。

が生じて居る。華やかな裡に苔の生えた、燻しのかゝつた、曇つた、物靜かな、幽寂な、神祕な趣がある。この美麗な數々の文句を寂びた趣味で裏打して繫いで居る所が、實に當時の武士が簡易に住して華麗に憧憬した心情とぴつたりと契合して居る所で、謠曲の特色・價値・生命が茲に存するのである。

この味ひは謠曲の實演せらるゝ能を見れば、一層明かになる。能舞臺に入つてまづ目につくのは、正面の鏡板に畫かれた一本の老松、――千年の苔にさびて大地にすわり込んだやうな神々しい老松――あの老松は天地・山川・風水・月露・雨雪・雷電・花鳥・木石等のあらゆる自然現象、老若・男女・貴賤・貧富・平和・鬪爭・喜怒・哀樂等のあらゆる人事の背景として用ひられ、その寂びた靜かな風趣を以て善惡・美醜・莊嚴・滑稽、あらゆる所作を統べて居る。役者の謠ひぶり舞ひぶりは、例の寂

びた落ちついた底力のある聲や曲や所作を以て全體を一貫して居る。悲しい事も、嬉しい事も、華やかな事も、淋しい事も、可笑しい事も、恐ろしい事も、若い者の事も、年寄の事も、男の事も、女の事も、天女の事も、鬼神の事も、散歩も、駈足も、すべて寂び色の同一色、曇つた苔の生えた底力のある聲であらはす。「春霞たなびきにけり久方の桂の花や咲く。」といふが如き華やかな文句をば、鶯の如き嬌音で謠ふかと思へば、何のやはりドホラ〳〵の老人聲、仙人聲、肉食火食とは緣の遠さうな木食式の聲である。松風や大原御幸の優婉な曲も、業平も、小町も、天人も、源氏ものも、花の精も、燦爛赫奕たる文句も、其の通りである。「急ぎ候ほどに。」とは謠ふが、悠々寛々、至極太平なものである。泣くには手の目を離るゝこと三寸ばかり。能の術語に、悲しみて俯向く樣を曇るといひ、泣く事を

春霞云々　「羽衣」の句。第四八頁一三行參照。

源氏もの　源氏物語に題材をとれるもの。

萎るとはよく云うたもので、いかにもよく能の特色を説明して居る。音樂はといふと、大小鼓・笛のドン〳〵ピイ〳〵で、叩き聲・ひしぎ聲の餘韻の無いもの。地謠はといふと、シテ・ワキ・ツレの聲の甲高になり易いのを、曇つたドホラ聲で抑へ抑へ鎭め鎭めて行く。面はあの通りの澁い艶消しの神祕的のものである。華麗に憧憬して簡易に安住した武士の心持は、なんと此の中に毫末の遺憾もなく現されて居るではないか。殊に謠はれる詞章が絢爛の名句づくめなることと對照して、一層面白い。

我が謠曲・能樂の特色を見て思ひ浮かぶのは希臘美術の特色である。ヴィンケルマンは、其の名著「古代美術史」の中に、希臘美術の特色を説明して、希臘美術の妙味は高潔にして靜寂なる威嚴の備つた所にある、其の彫刻を見ると、いづれ

シテ　爲手の義。その曲の主人公たる役。中入ある能にては、前シテ・後シテの區別あり。

ワキ　シテの相手となりて働く能役者。脇師。

ツレ　「連れ」の義。シテ又はワキの副者の名。

ヴィンケルマン　Winckelmann.(1717—1763)獨逸の美術批評家。

も情海波瀾の中に於て、靜かな重々しい落付があるといひ、例の名彫刻ラオコオンを論じて、表には苦痛呻吟の情の千波萬波を浮かべて居るが、底には寂然として騷がざる落付があると云つて居る。謠曲・能樂に現るゝ味ひも大分これに似通うた所があつて、言葉・文字の表面には多くの美しい事物や複雜な感情が現れて居るが、それをば一種の單純質樸な、寂びのある威嚴で繫いで落付かせてゐる。そしてこれに接すると、謠ふ者も、舞ふ者も、見る者も、聞く者も、寂びた落付を感じて、心が上品になり、野卑陋劣な俗情を洗ひ流されたやうな心地がする。「能のあと三日。」といふのはこれで、此の感じは、芝居や、淨瑠璃や、落語や、俗歌や、小說や、音樂などでは、到底得られぬものである。

およそ文藝は、必ずしも人に慰安を與へ心を落付かせねばならぬものとは限らぬ。相手を有頂天にしても、問題を與へて考へさせても、悶えさせても、いま〳〵しがらせても、不快を感じさせても、その心を壓迫して人間が厭にならせても、必ずしも其の藝術品たるを妨げまい。けれども、相手の心を落付かせ、鄙俗の心を洗ひ流させるといふことが文藝の主要な、又高尙な本領の一つであることは疑の無いことで、此の點に於て謠曲・能樂は、わが古今の文藝に比類のない位置を占めて居るものであると考へる。（五十嵐　力の文による）

我々は如何なる目的に向つてすゝみ、如何なる理想を立つべきか、我々の生息してゐる現社會は如何なるものであるか、それは如何なる發達變遷を遂げ來たか、將來如何に發展して行くべきか。これ等の問題を直觀的に美しく我々の目前に提出するものは文藝である。而して人格の大なる作家ほど、感化を與へることが大である。（藤代禎輔）

ラオコオン Laocoön. ローマの詩人ヴィルギリウスの敍事詩「エネイド」中にうたはれし人物。その海蛇に卷かれし苦みを表現したる像。今ローマのヴァチカン宮殿に在り。

五十嵐　力 國文學者。文學博士。明治七年米澤市に生る。早稻田大學教授。

藤代禎輔 文學博士。京都帝國大學教授。昭和二年歿、年六十一。

五羽衣

ワキ　漁夫白龍
ワキツレ　同行漁夫
シテ　天女

ワキ一聲「風早の三保の浦曲を漕ぐ船の、浦人さわぐ涙路かな。

ワキ、サシ謠「これは三保の松原に白龍と申す漁夫にて候。

ワキツレ謠「萬里の好山に雲乍ち起り、一樓の明月に雨初めて晴れたり。げにのどかなる時しもや、春のけしき松原の、涙立ちつゞく朝霞、月ものこりの天の原、及びなき身の眺めにも、心空なるけしきかな。歌「忘れめや、山路をわけてきよ見潟、はるかに三保の松原に、たちつれいざや通はん。風向ふ雲のうき涙たつと見て、釣せで人や歸るらん。待てしばし、春ならば、吹

風早の云々　萬葉集に「風早の三保の浦曲を漕ぐ舟の舟人さわぐ涙立つらしも」

三保の松原　駿河國有度郡。

萬里の好山云々　詩人玉屑に「千里好山雲乍起、一樓明月雨初晴」

及びなき身云々　續拾遺集に「いかならばなき世とか思ふ見るからに心空なる天の羽衣」

忘れめや云々　續古今集に「忘れずよ清見が關の涙間より霞みて見えし三保の松原」

くものどけき朝風の、松は常磐の聲ぞかし。涙は音なき朝なぎに、釣人おほき小舟かな。ワキ詞「われ三保の松原にあがり、浦のけしきをながむる所に、虛空に花ふり、音樂きこえ、靈香四方に薫ず。これたゞごとと思はぬ所に、これなる松に、うつくしき衣かゝれり。よりて見れば、色香妙にして常の衣にあらず。いかさま取りて歸り、古き人にも見せ、家の寶となさばやと存じ候。

シテ詞「なう、その衣はこなたのにて候。何しに召され候ふぞ。

ワキ詞「これは拾ひたる衣にて候ふほどに、取りて歸り候ふよ。

シテ詞「それは天人の羽衣とて、たやすく人間に與ふべき物にあらず。元の如くにおき給へ。ワキ詞「そもこの衣の御主とは、さては天人にてましますかや。さもあらば、末世の奇特にとゞめおき、國の寶となすべきなり。衣を返す事あるまじ。シテ詞「悲

風向ふ云々　冷泉爲相の歌に「風向ふ雲の浮涙立つと見て釣せぬ先に歸る舟人」

しやな、羽衣なくては飛行のみちも絶え、天上に還らんことも叶ふまじ。さりとては返したび給へ。ワキ謠「この御詞をきくよりも、いよ〳〵白龍力を得、詞「もとよりこの身は心なき、天の羽衣取り隱し、謠「叶ふまじとて立ちのけば、シテ謠「今はさながら天人も、羽なき鳥の如くにて、あがらんとすれば衣なし。ワキ謠「地にまた住めば下界なり、シテ謠「とやあらん、かくやあらんとかなしめど、ワキ謠「白龍衣を返さねば、シテ謠「力およばず、ワキ謠「せんかたも、地謠「涙の露の玉鬘、かざしの花もしを〳〵と、天人の五衰も、目の前に見えてあさましや。

シテ謠「天の原、ふりさけ見れば霞立つ、雲路まどひてゆくへしらずも。地謠「すみ馴れし、空にいつしかゆく雲の、うらやましきけしきかな。迦陵頻伽のなれ〳〵し、聲今さらにわづかなる、雁がねの歸りゆく、天路を聞けばなつかしや。千鳥・鷗の

天人の五衰 天人が命終の時、五つの死滅の異相を生ずるといふ。その中に頭上華萎の相あり。

天の原の歌 丹後風土記に出づ。

迦陵頻伽 梵語。妙聲鳥と譯す。

沖つ浪、行くか歸るか春風の、空に吹くまでなつかしや。

ワキ詞「いかに申し候。御姿を見たてまつれば、あまりに御痛はしく候ふほどに、衣を返し申さうずるにて候。シテ詞「あらうれしや。こなたへ賜はり候へ。ワキ詞「しばらく。承り及びたる天人の舞樂、たゞ今こゝにて奏し給はば、衣を返し申すべし。シテ謠「うれしや。さては天上に還らん事を得たり。このよろこびに、とてもさらば、人間の御遊のかたみの舞、月宮を廻らす舞曲あり。唯今こゝにて奏しつゝ、世のうき人に傳ふべし。さりながら、衣なくては叶ふまじ。さりとてはまづ返し給へ。ワキ詞「いや、この衣を返しなば、舞曲をなさでその儘に、天にや上り給ふべき。シテ詞「いや、疑は人間にあり。天に僞なきものを。ワキ謠「あらはづかしや。さらばとて、羽衣を返し與ふれば、シテ謠少女は衣を著しつつ、霓裳羽衣の曲をなし、ワキ謠「天の羽衣風

とてもさらば とてもおくてもの意。

月宮 月世界の宮殿。

に和し、シテ謠「雨にうるほふ花の袖、ツキ謠「一曲をかなで、シテ謠「舞ふとかや。地謠「東遊の駿河舞、この時や始なるらん。

クリ地謠「それ久かたのあめといつぱ、二神出世のいにしへ、十方世界をさだめしに、空はかぎりも無ければとて、久かたの空とは名附けたり。シテ、サシ謠「然るに月宮殿のありさま、玉斧の修理とこしなへにして、地謠「白衣・黒衣の天人の、數を三五にわかつて、一月夜々のあま少女、奉仕を定め役をなす。シテ謠「我も數ある天少女、地謠「月のかつらの身をわけて、かりに東の駿河舞、世につたへたる曲とかや。クセ「春霞たなびきにけり久かたの、月のかつらも

二神 伊弉諾・伊弉冊の二尊。

十方 東西南北乾坤巽艮上下。

挿繪 羽衣。

春霞云々 後撰集「春霞たなびきにけり久方の月の桂も花や咲くらむ」

花や咲く。げに花かつら色めくは、春のしるしかや。おもしろや天ならで、こゝも妙なり天津風、雲の通ひぢ吹きとぢよ。少女の姿しばしとゞまりて、この松原の春のいろを三保がさき、月清みがた、富士の雪、いづれや春の曙、たぐひ涙も、松風も、のどかなる浦のありさま。その上天地は、何を隔てん玉垣の、内外の神の御するゑにて、月も曇らぬ日の本や。シテ謠「君が代は、天の羽衣まれにきて、地謠「撫づとも盡きぬ巖ぞと、聞くも妙なり東歌。聲そへてかず〳〵の、笙・笛・琴・箜篌、孤雲の外に充ち滿ちて、落日の紅は、蘇命路の山をうつして、緑は涙に浮島が、はらふ嵐に花ふりて、げに雪をめぐらす白雲の袖ぞ妙なる。シテ謠「南無歸命月天子、本地大勢至。地謠「東遊の舞の曲、シテ、ツキ謠「或は天つみ空の緑の衣、地謠「又は春立つ霞の衣、シテ謠「色香も妙なり少女の裳裾、地謠「左右左、さいう颯々の、花をかざしの

天津風云々 古今集「天津風雲のかよひぢ吹きとぢよ少女の姿しばしとゞめむ」

君が代は云々 拾遺集「君が代は天の羽衣まれにきて撫づともつきぬ巖なるらむ」

蘇命路の山 須彌山ともいふ。佛經に出づ。

天の羽袖靡くもかへすも舞の袖。（キヽ地謠「東遊のかず〳〵に、その名も月の宮人は、三五夜中のそらに又、滿願眞如の影となり、御願圓滿、國土成就、七寶充滿の寶をふらし、國土にこれを施し給ふ。さる程に時移つて、天の羽衣浦風に、たなびきたなびく三保の松原、浮島が雲の、あしたか山や富士の高嶺、かすかになりて、天つみ空の霞に紛れて失せにけり。（觀世謠本）

觀世左近は謠に名を得たるものなり。謠に三病あり。聲のよきと、覺の强きと、拍子のきゝたると、この事備はれるもの、多分謠にならずして止む。」と人に敎へつ。これいづれの道にもあるべき事なり。器用を賴むものは自ら滿てりとす。自ら滿てりとするものは工夫を積まず、工夫を積まざるものは諸藝の奥意をさとり難し。（武家感狀記）

保三く行け明

六　入間川

大名　熨斗目・素襖・大臣烏帽子・小さ刀。
太郎冠者　半袴・上下、太刀持つ。
入間　長袴・小さ刀。

大名「八幡大名。なが〳〵在京致すところに、訴訟思ひのまゝに相叶ひ、このやうな嬉しいことはない。まづ太郎冠者を呼出し、喜ばせう。と存ずる。やい〳〵太郎冠者、あるかやい。冠者「はあ。大名「居たか。冠者「お前に居ります。大名「早かつた。汝を呼出すこと、別のことではない。なが〳〵在京するところに、訴訟思ひのまゝに相叶ひ、追つ付け國許へ下る。何とめでたいことではないか。冠者「これは御意の通り、おめでたいことでござる。大名「その儀ならば、追つ付け下らう。供をせい。冠者「畏つ

てござる。大名(道行)「やい〳〵汝は精を出して、よう奉公したほどに、國許へ行たらば、馬に乗せうぞ。冠者「それは忝うござる。大名「さりながら、馬に乗るまでは牛に乗れといふ。まづ牛に乗せうぞ。冠者「それは兎も角もでござる。大名「これは戯言。馬に乗せうぞ。冠者「いよ〳〵忝うござります。大名「やい太郎冠者、向うに眞白に見ゆるは富士山であらうなあ。冠者「成程富士山でござる。大名「三國に隠れもない名山ぢやと云ふが、見事な山ぢやなあ。冠者「左様でござります。(大名道行)「さあ來い、さあ來い。はや駿河の國へ來た。急げ〳〵。やあ、これは渺々とした野へ出た。定めてこれが武藏野であらう。さても〳〵廣いことぢやなあ。冠者「廣い野でござります。大名「もはや國許へも程近い。さあ來い、さあ來い。冠者「參ります。大名「やあ、これに大きな川がある。これは何といふ川ぢや。上りにもあつた川

馬に乗せうぞ 身分の無きものは馬に乗ることのならざるが當時の制なり。

三國 日本・唐・天竺。

か覺えぬ。冠者「されば覺えませぬ。大名「誰ぞ在所の者が見えたら尋ねたい。入間何某「これは入間に隠れもない何某でござる。川向うへ用所あつて參る。大名「やあ、向うに人が見ゆる。尋ねて見よう。やい〳〵向うな者に物が問ひたいやいやい。入間「これは如何な事。この邊で、某にあの如く云ふ者は覺えぬ。返事の致し様がある。やい〳〵、物が問ひたいと云ふはこちの事か。何事ぢややい。大名「これは憎い奴の。太郎冠者や太刀をおこせい。冠者「これは何となされます。大名「いや、某に今の様な慮外をぬかす。打切つてくれう。冠者「いや、左様でござらぬ。お國許でこそこなたを見知りませう。こゝもとでは、見知らぬによつての事でござる。言葉を直してお尋ねなされませ。大名「それもさうぢや。言葉を直さう。まうし〳〵向うなお方に物が問ひたう

慮外 無禮

ござる。入間「これは如何なこと、言葉を直した。まうし〳〵物が尋ねたいと仰せらるゝは、此方のことでござるか。何事でござるぞ。大名「さても〳〵可笑しいことかな。言葉を直した。川の名を問はう。まうし〳〵、この川は何と申す川でござる。

入間「これは入間川と申します。

大名「やい太郎冠者、入間川ぢやと云ふわ。冠者「さやうでござる。

大名「渡り瀬を問はう。まうし〳〵この川は何處もとを渡ります。

又こなたの名は何と申す。入間「身どもは、入間の何某でござる。この川は、これより上を渡ります。此處は深うござる。大名「やい〳〵何某ぢやと云ふは。最前腹を立てたが道理ぢや。渡

挿絵　入間川。

り瀬は上を渡ると云ふ。さあ〳〵知れた。渡れ渡れ。冠者「いやいや其處は深いと申します。御無用でござる。大名「いや〳〵身どもが合點ぢや。此處を渡れ渡れ。入間「まうし〳〵其處は深うござる。御無用ぢや。止めさせられ、止めさせられ。大名「さあ〳〵太郎冠者、渡れ渡れ。これは如何なこと。南無三寶、やれ、流れるは流れるは。入間「はあ、これは深いと申すに。笑止な。大名「おのれ憎い奴の。やることではないぞ。成敗する。入間「これは何とめさるぞ。大名「最前に川の名を問へば入間川といふ。渡り瀬はと問へば、此處は深い、上へ廻れといふ。總じて入間言葉には逆語を使ふにより、此處を深いと云ふは淺いと云ふこと、上へ廻れといふは此處を渡れと云ふことと心得て渡つたれば、諸侍に欲しうもない水をくれたほどに、成敗するぞ。入間「扨はこなたには、入間言葉をよく御存じでお遣ひ

南無三寶　驚きの甚しきにいふ詞。どうぞ三寶よ守護し給への意。

入間言葉　入間やうともいふ。反對に言ふと意を逆にいふとの二樣あり。

なさるゝな。大名「なか〳〵知つて居る。入間「何と、成敗せうと仰せらるゝは定でござるか。大名「なか〳〵定ぢや。入間「とてものことに御誓言で承りませう。大名「何がさて、弓矢八幡成敗いたす。入間「あら心安やざつと濟んだ。大名「これは如何なこと。成敗せうと云へば、あら心安やざつと濟んだと云ふは、どうしたことぢや。入間「さればそのことぢや。こなたは入間言葉を御存じでお遣ひなさるゝによつて、成敗せうと仰せらるゝは、弓矢八幡成敗せまいと云ふことぢやと思うて、あら心安やざつと濟んだと申すことでござる。大名「これでほうどした。助けずばなるまい。冠者「お助けなされたがようござりませう。大名「これ〳〵わごりよの命を、最早助くるでもおりないぞ。入間「身共が命を助けもなさらねば、忝うもござらぬ。大名(大笑あり)「さても〳〵をかしいことかな。やい〳〵太

定 必定といふに同じ。

弓矢八幡 弓矢の道の祖神たる八幡に誓を立つる意。

ほうどした 行詰つた、の意。

おりない 御座らぬの意。

郎冠者、命を助かつて忝うないと云ふは、可笑しいことではないか。何ぞ遣つて入間言葉を聞かう。これ〳〵、この扇は京折りでもなけれども、そなたへ進ずるでもおりないぞ。入間「京折りでもござらぬ扇を下されも致さねば、滿足にも存じませぬ。大名(大笑あり)「さても〳〵可笑しい。物を貰うて嬉しうないと云ふは。これ〳〵、この太刀・かたなは重代なれども、遣るでもおりないぞ。入間「重代でもござらぬ太刀・かたなを下されもなされねば、祝著にも存ぜぬ。大名(大笑あり)「なう〳〵可笑しや、可笑しや。何をやつても嬉しうないと云ふ。太郎冠者も何ぞ遣つて、入間言葉を聞かぬか。冠者「いや、私は何も遣る物がござらぬ。大名「やあ、この袴・小袖もやつて、入間言葉を聞かう。さあ〳〵脱がせ、脱がせ。なう〳〵、この袴・小袖は、水に濡れも致さねば、其方におまらするでもおりやらぬぞ。入間「これは

京折り 京郡にて折りたる扇は上等の品なり。

結構にもない裃・小袖を、下されも致さねば、嬉しうもござらぬ。大名「まだ嬉しうないといふ。さてもく可笑しいことかな。入間言葉は面白いものかな。

入間「一段の仕合せでござる。すかさうと存ずる。大名「なうなう、これく、先づ戻りやるな。入間「いやこれを置いて參るまい。大名「いや、用がおりない。先づ戻りやるな。入間「何事でおりやる。大名「何と、その如くに色々の物貰うて、眞實は嬉しいか、嬉しうないか、おしやれ。入間「いや添うもござらぬ。大名「いやいや、それは入間やう。最早入間言葉をさらりと捨てて、眞實は嬉しいか、嬉しうないか、おしやれ。入間「眞實は思しめしてもごらうぜ。この如くに太刀・刀・裃・小袖まで下されて、何がさて添うもござらぬ。大名「はてさてくどい人ぢや。その入間言葉をさらりと止めて、眞實をおしやれ。入間「眞實は何かござ

すかさう はづさう。

入間やう 入間風。

らう。この如くに結構なもの、さまく下されて、添うないと云ふことがござらうか。身にあまりて添うござる。大名「何と、添い。入間「なかく。大名「添いとは、添うないと云ふことであらう。こちへ返せ。入間「いやく、遣ることでないぞ。大名「どうでも返さぬか。さあ取つたぞ。入間「やいく、たらしめ。どこへやることでないぞ。やるまいぞ、やるまいぞ、やるまいぞ。

（狂言記による）

能因入道は至れるすき者なり。

都をば霞とともに立ちしかど秋かぜぞ吹くしら川の關

と詠めりけるを、都にありながらこの歌を出さんは無念と思ひて、人にも知られず、久しく籠りゐて色を黒く日にあぶりなして後、みちのくの方へ修行のついでに詠みたりとぞ披露しける。（十訓抄）

たらしめ 人を欺ず者。

狂言記 元祿年間刊行せられたる繪入狂言記の中。

十訓抄 三卷。作者不詳。舊談古說の教訓にかゝあるもの二百五十條を十目の下に收錄す。鎌倉の中葉（一九一二頃）に出づ。

七　馬方三吉

お傍の衆に囃されて、幼心の姫君「かう面白い束とは、今までおれは知らなんだ。さあ〳〵往かう、はや往かう。」「やあ御座らうとおつしやるか。そりやめでたいは、めでたいは。又もや御意の變らぬ間に、行列揃へ。」と立騒ぐ。お乳の人は勇みをなし、「左様なら、ま一度大殿様・お袋様とお盃。これも馬子殿のお蔭ぢや、出來いた出來いた。其方には禮いふ、褒美やる。其處に待ちやや。」とさゞめき渡り、奥に御供し入りにけり。

馬子は遂に見ぬ金の間を、うろ〳〵と覗き廻れど、筵のほか踏みも習はぬ備後表、三吉「えゝ、此の座敷はぎやうに滑つて歩かれぬ。大名の家よりも此方の内がけつこで御座る。」と、獨言して居たりけり。お乳の人は大高にお菓子様々ぶんかうに盛入れ、「どれ〳〵」三吉其處にか。まあ〳〵其方はけな者ぢや。道中雙六お目にかけ、それ故に姫君様お江戸へ御座らうと御意なさるゝ。お上にも御機嫌。これは御前のお菓子、有り難う戴きや。お錢三筋、買ひたい物買やや。殊に其方は通しぢやげな。道中すがらも用あらば、お乳の人の滋の井に逢はうといや。見れば見るほどよい子ぢやに、馬方させる親の身は、よく〳〵であらう。」と、いと懇ろの詞の末、三吉つく〴〵聞きすまし、「由留木殿の御内、お乳の人の滋の井様とはお前か。そんなら己が母様。」と抱付けば、滋の井「あゝこは慮外な。おのれが母様とは。馬方の子は持たぬ。」と、もぎ放せばむしやぶりつき、引きのくれば縋りつき、三吉「なんの無いこと申しませう。わしが親はお前の昔の偶配、此の御家中にて番頭伊達の與作、其の子は私、此方様の腹から出た與之助はわしぢやはい

姫君　しらべの姫は、丹波國の一城主由留木殿の女。江戸の高家入間殿へ養女として赴くにつき、已に入間殿より迎への使も來る。時に十歳の姫はその江戸への旅立ちに際して、俄にこれをいなみて一同を困却せしむ。そこに十歳ばかりの馬方三吉ありて東海道中雙六を演じて姫の御機嫌をなほす。再び旅立つこととなりぬ。

大高　大高檀紙の略。

ぶんがう　菓子入。

けな者　けなげな者の略。

錢三筋　三百文。

通し　江戸まで通し雇ひの意。

の。父様は殿様のお氣に違うて、國をお出なされたは三つの時でおろ覺え、沓掛の姥が咄には、『母様も離別とやらで殿様に御奉公。こなたを姥が養育し、父様に逢はせたう思へども甲斐もない。母様の細工の守袋を證據に、由留木殿のお乳の人、滋の井様と尋ねよ。』と懇ろに敎へて、姥はおれが五つの年、久しう痰を煩うて、揚句に鳥羽の祭に往て、餅が喉に詰つて、つひ死んでのけました。在所の衆が養うて、漸う馬を追ひ習ひ、今は近江の石部の馬借に奉公しまする。これ守袋を見さしやんせ。何の嘘を申しませう。お前の子に紛れはない。外に望は何もない。父様を尋ね出し、一日たりとも三人一處に居て下され。見事、沓も打ちまする。此の草鞋もわしが作つた。晝は馬を追うて、夜は沓打ち草鞋作り、父様・母様養ひませう。父様と一つに居て下され。拜みまする母様。」と、取付き抱付き泣

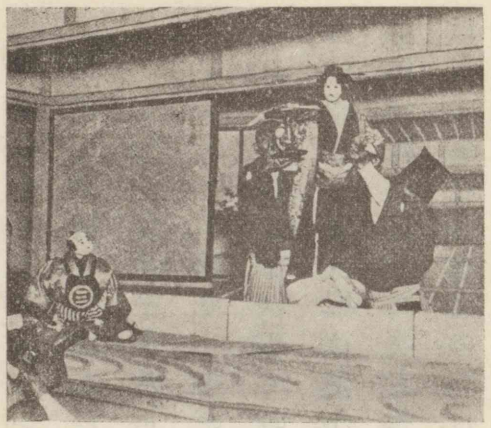
沓掛　京都府乙訓郡大枝村沓掛。

鳥羽　京都市の南方にある町。

馬借　馬を借して業となすもの。

き居たり。

お乳ははつと氣も亂れ、見れば見る程我が子の與之助。守袋も覺えあり。飛付いて懷に抱き入れたく氣はせけども、あつあ大事の御奉公、養ひ君のお名の疵。詐つて叱らうか。いや可愛げにさうも成るまい。まあちよつと抱きたい。あゝどうせうと、百千色の憂き涙、雙つの眼には保ちかね、咽び沈んで居たりしが、いや〳〵我が子ながらもさかしいもの、詐つて誠とせず、母を心の穢いものと、蔑まるゝも情なし。譯を語つて合點させ、恥ぢしめて返さんものと、涙拭うて氣を靜め、「こゝへ來い、與之助。」と、引寄せて



挿絵　人形淨瑠璃。

兩手を取り、「さても大きうなりやつたの。とても成人せうならば、侍らしうなぜ尋常にも育たぬぞ。顔の道具・手足まで、母は斯うは産付けぬ。美しい黒髪を、このやうに剃下げて、手足は山のこけ猿ぢや。ほんに氏より育ちぞ。」と、又さめ〴〵と泣きけるが、「これ、物を合點しや。腹から産んだは産んだれども、今では子でも母でもない。淺ましう成りさがつたを嫌うて云ふでは更々ない。こゝの譯をよう聞きやや。母はもと御前様の奉公人、與作殿は奥小姓、殿様の御慈悲にて夫婦になされ、與作殿は段々に奏者役番頭、千三百石までお取立て、追腹ほどの御恩の家。其の間にそなたを設け、上には姫様御誕生、御内證のよしみにて、母が乳を上げまし、首尾さへよければ、そなたも今家老衆の子同然に、二番と下座にはさがらぬ人。なさけなや父様が江戸詰に、大事のところを仕損ひ、また切

とても云々　同じく成人するならば。

御前様　由留木殿の奥方。

追腹ほどの御恩　主人に殉死せねばならぬほどの身分となりし御恩。

御内證　しらべの姫の實母。

腹に極つたなれども、腹を切らせては、女房お家に置かれぬ時には、大事のお姫様の乳離れ、御病氣も出ればいかゞとて、母を其のまゝ殘さうため、父様の命助り、奉公構ひの御改易。其の時母も一緒に退けば、尤も夫婦の道は立つ。お姫様の乳離れ、お苦みをかけまし、身に餘つたお家の御恩、誰がいつの世に報ぜん。殘つて御恩を報じてくれと父様のことわり故、第一は夫のため、夫婦の義理を忠義にかへて、あかぬ離別をしたはいの。男の子は幼うても御勘氣の末、氣づかひな。與作が子とばし云やんなや。さあ早う御門へ出や。あゝ、いかなる因果な生れ性、現在我が子に馬追させ、夫の行方も知らぬ身が、母は衣裳を著飾つて、お乳の人よお局よと、玉の輿に乘つたとて、これが何になること。」と、聲を忍びに泣くばかり。子は生れつき賢くて聞分け有るほどなほ泣入り、三吉「悲しい咄

奉公構ひの御改易　當家の士の中より名籍を除くこと「構ひ」は追放の意。

ばし　接尾語。

を聞きました。さりながら常に姥が申したは、姫君様と私とは乳兄弟のことなれば、母様にさへ逢うたらば、父様も出世なさるゝ由、御訴訟なされ下されかし。」と、いへばちやつと口を押へ、滋の井「あゝ勿體ない、其の乳兄弟いはぬこと。姫君様は關東へ養子嫁御にお下り。高いも低いも姫御前は大事のもの。先は他人の世間體、三吉といふ馬追が乳兄弟に有るなどと、どう妨げにならうやら。蟻の穴から堤も崩れる。輕いやうで重いこと。ひそ〳〵云うて人も聞く。先づ早う出てくれ。」と泣く〳〵云へば、三吉「あゝ母様あんまり遠慮過ぎました。先づ云うて見て下され。」滋の井「まだ云ひ居るか、聞分けない。夫のこと、我が子のこと、母に如才が有るものか。合點のわるい聞分けない。」と制する内に、奥よりも「お乳の人はどこにぞ。御前から召します。」と呼ばはれば、滋の井、あれ聞きや、人が來る。出

蟻の穴云々　韓非子に「千丈之隄以二蟻螻之穴一潰」

てたも。」と手を取つて引出す。

不便や三吉しく〳〵涙。頬冠して目を隠し、杏見まつべて腰に附け、見すぼらしげな後影。滋の井「こりや、ま一度こちら向きや。山川で怪我しやんな。雨風・雪降・夜道には、腹が痛いと作病起し、二日も三日も休んで、煩はぬやうにしてたも。毒な物喰はずに、腹や麻疹の用心しや。可愛のなりや、いた〳〵しや。千三百石の代取が何の罰ぞ、咎ぞ。」と、式代の段箱に身を投伏せて歎きしが、懐中の有合一歩十三、服紗に包み、「これたしなみに持つて居や。」と、涙ながらに渡さるゝ。三吉見返り恨めしげに、「母でも子でもないならば、病まうと死なうといらぬおかまひ。其の一歩もいらぬ。馬方こそすれ、伊達の與作が惣領ぢや。母様でもない他人に金貴はう筈がない。えゝ胴慾な母様、覺えて居さつしやれ。」と、わつと泣出す其の有様。母は魂消

杏見まつべて　杏を調べまとめて。

式代　玄關の板敷。

え入りて、「養ひ君、お家の御恩思はずば、さて一人子を手放して、何の遣らうぞ。奉公の身の淺ましや。」と、悶え焦れて歎きける。

時に奥口さゞめいて、「早御立ち。」と、姫君のお輿舁きあげ行列立て、お乳の人の乘物をひら付けにこそ舁きよせけれ。お乳はさあらぬ顔付して、「姫君の御伽に最前の馬方を此の乘物に引付け、お慰みに謠はしや。」「畏つた。」と宰領ども、こりや、其處なじねんじよめ、謠ひ居らう。」と、ぎごつなく、「やあ此奴はほえをるか。何ぢやこりやいま〳〵し。」と、握り拳を二つ三つ、項きながら泣聲に、三吉「坂はてる〳〵鈴鹿は曇る、土山あひの、あひの土山雨がふる。」ふる雨よりも親子の涙、中にしぐるゝ雨宿り。（近松門左衞門―「丹波與作」）

じねんじよ　三吉の渾名。
ぎごつなく　愛想なく。

近松門左衞門　本名杉森信盛。新淨瑠璃の創始者。享保九年歿、年七十二。（一六五三―一七二四）

八　生命の冠（第二幕）

場所――樺太西海岸マウカ
時代――現代

三月の中頃、昨日來の雪が上つて、外は日光がきら〳〵と輝いてゐる。

有村、表から悄然と這入つて來る。そして煖爐の傍に腰を下す。

欽次郎、製造場から出て來る。

欽次郎「あ、兄さん、いつ歸つて來たんです。

有　村「今歸つて來たのだ。

欽次郎「どうでした、アラカイの方は。

有　村「やはり法外のことをいつてゐて、迎も手が出せない。

欽次郎「人の足許をつけ込むなんて、どいつもこいつも厭な奴

有村罐詰製造所の内部　家の構造は大體露西亞作りで、丸太を組合はせて作つてある。正面奥、右手に疊敷の日本間がある。所謂店座敷で、障子を隔てて奥に通ずるやうになつてゐる。他は總べて板敷の土間。正面奥、中央に出入りの硝子扉がある。その奥に二重になつて入口の扉がある。なほ正面に硝子窓が一つ。それから扉の上の空間には四五尺もある大蟹の甲良が額のやうに掛けてある。家の左右に出入口が一つ宛ある。左側の口は、その扉の眞上に打附けてある「罐詰製造場」といふ木札で、何處に聯絡してゐるか直ぐに知ら

ばかりだな。厭な奴といへば、さつき久富商會の片柳が來ましたよ。

有　村「それからどうした。

欽次郎「人を思ひ切り壓迫しておき乍ら、しらばつくれたことをいつて來ましたから、面と向つて、うんといつてやりました。

有　村「さうか、火蓋を切つたか。

欽次郎「え、やつゝけました、迚も默つちやゐられませんから。

罐詰工、製造場から出て來る。

罐詰工「旦那、雌蟹や仔蟹はどうしませう。

有　村「あれは使つちやならないといつてあるぢやないか。

罐詰工「ですけれども、あれを使はなくつちや、迚も間に合ひません。

れる。また右側は日本式の引戸になつてゐて、勝手の方に通じてゐる。土間の稍左手に鐵製の煖爐が置いてある。その周圍に椅子が二三個。

マウカ　眞岡。樺太南部西岸の港。鮭漁の中心地。

有村　有村恒太郎。有村罐詰製造所主。

欽次郎　恒太郎の弟。

アラカイ　眞岡に北接する漁場。

久富商會　神戸の貿易商。

片柳　片柳玄治。久富商會の樺太出張所長。

有　村「間に合はなくつても、あんな蟹は一切使つちやならないといふのに。

罐詰工「ぢや、どうしませう。蒸釜は煮立つてゐるんですが。

欽次郎「まあいゝ。こちらから言つてやるから。

罐詰工「へえ。（製造場へ去る）

欽次郎「兄さん、あなたのやうに嚴重なことをいつてゐたら、とても品は間に合ひませんよ。

有　村「併しこれから繁殖する雌蟹や、仔蟹を使ふことは出來ないぢやないか。

欽次郎「さういひますがね、兄さん。あれを濫獲しない限りいゝぢやありませんか。一度網に懸つて來た以上、假令船から直に捨ててやつたつて、もう網にからまつた奴は足を痛められてゐますから、少くとも半死か、大抵は死んで了ふ

「あんな蟹は一切使つちやならないといふのに」

のです。どうせ海に放してやつて死んで了ふものなら、雌蟹だつて仔蟹だつて使つてもいゝぢやありませんか。

有村「それ許りぢやない。雌蟹や仔蟹はアルカリ性が強いから黒變する患がある。

欽次郎「なあに、それも製造法を少し氣をつけて、硫酸紙を丁寧に敷きさへすれば防げますよ。

有村「いや、第一品質が劣るからいけない。あんなものは一等品には使へないぢやないか。

欽次郎「その點も罐詰のことですから、何とか誤魔化しがきくぢやありませんか。

郵便配達夫「郵便！」と手紙をおいて行く。

欽次郎（それを受取つて讀む。）「やあ、また値上げだ。

有村「どこから來たのだ。

アルカリ性　金屬化合物にして、水溶液となりては赤色リトマス溶液を青色に變ずる作用をなす。

欽次郎「東洋製罐です。罐がまた三割値上げだといふのです。

有村「弱つたな。

欽次郎「蟹は高い、罐は上がる、かう何もかも高くつちや、とてもやり切れやしない。兄さん、もう非常手段を講ずるより外ありませんよ。

有村「非常手段とは、品を落して、どこまでもうちの持船で間に合はせようといふのか。

欽次郎「さうです。さうでなかつたら——昨夜も遲くまで二人で計算を立てて見たでせう。他から蟹を買つては、何萬つて損するんですからね。その上、罐が三割も値上げになつたとすりや、とてもやつて行けようがないぢやありませんか。

有村「併し一等品といふ契約に等外品は送れないからね。

一等品といふ契約　英國から有村が一等品といふ契約で二十四萬罐（五千函）の註文を受けたるなりふ。

欽次郎「そんなこといつたつて、今の場合爲方がないぢやないですか。

醫師匹田、女中に送られて奥から出て來る。

匹田「いや、もう構はんでくれ、構はんで。

兄弟は醫師の言葉を聞きつけて、話をぴたりと止める。

有村「あ、先生がおいでになつてゐたのですか。少しも知りませんで。

匹田「いや、お構ひ下すつては困る。時に奥さんは今日は少し熱が低いやうだ。あの分なら心配のことはありません。

有村「いろ〳〵有り難うございます。

欽次郎「今日は先生、朝の御回診ですか。

匹田「いや、昨夜、そら汽船が沈没したらう。あの乘組員に病人が出來たものだから、今その歸り道さ。丁度、お門を通つた

からお寄りしました。

有村「あ、さうですか。それはどうも御親切に。

欽次郎「汽船といへば、氣の毒なことをしましたね。でも運送船とかで、お客が乘つてゐなかつたのはせめてもの幸でした。

有村「乘組員はみんな助つたんですか。

匹田「みんな助つた。唯船長が可哀さうな事をしましたよ。

有村「どうしたのです。

匹田「船と一緒に沈んでしまつたのだ。

欽次郎「あ、船長は亡くなつたのですか。私はみんな助つたと聞いてをりましたが。

匹田「さうです。乘組の船員すらさう思つてゐたのです。所が、後になつて船長のゐないことが分つたのだ。

有村「どうしたのでせう。

四田「今わたしはその話を聽いて涙をこぼして了ひました。かうなのです。沈沒した北海丸は、小樽から荷を積んで、浦鹽に行く船だつたのです。所が、途中で嵐に遇つたものだから、それを避けようと思つて、このマウカにやつて來たのです。それでテーヤの沖まで來ると、あすこいらはあの通り暗礁の多い所だ。そこを吹雪は烈しい、船は小さいときてゐるから、船員は必死となつて働いたけれども、とう暗礁に乘上げて了つたのです。で、あつといふ間もなく、水はどし〳〵船に浸入して來たので、船長はもう仕方がないから、『全員甲板へ。』『ボート降し方。』を命じたのです。そして全員ボートに乘移つた所が、船長だけはまだ船に殘つてゐるのです。

四田「その挿話と劇の効果」
小樽 小樽灣。北海道西岸の開港場。

欽次郎「あゝ、それでとう〳〵船と運命を共にして了つたのですか。

四田「いや、さうぢやない。話はこれからなのです。それで船長がまだ甲板に殘つてゐるから、ボートに乘つた者は早く降りて來るやうに勸めたのです。すると船長は『おい、ちよつと待つてくれ、忘れ物をした。』といつて、飛ぶやうにデッキを下へ駈下りて行つたのです。

欽次郎「ほう。

四田「何しろ浪は逆卷く、夜は暗い。ボートに乘込んだ連中は氣が氣ぢやなかつた。併し船長は間もなく甲板に歸つて來ました。そして『いゝか、下りるぞ。』と大聲でどなつて、闇の中をずる〳〵と降りて來たのです。そこでボートは直ぐに本船を離れて、死にもの狂ひに突進したのです。で、やつ

と陸に着いて見ると、船長はゐないのです。

有村「どうしたのです。

匹田「あとからボートに降りたのは船長ぢやなかつたのです。

欽次郎「ぢや誰なのです。

匹田「料理の皿洗をやつてゐたボーイなのです。どうして此の男が一人乘後れたかといふと、此の男は二三日前に船の中で人の物を盗んだので、物置のやうな一室に監禁されてゐたのです。所が、今船が暗礁に乘上げて沈没するといふ時には、誰だつてわれ勝ちに逃げようとするから、一人として此のボーイのことなぞを考へてゐたものはありやしない。船長自身さへも危く忘れる所だつたのだ。下から早くボートにお乘んなさいといはれた時に、ふと監

禁したボーイのことを思ひ出したのです。そこで『忘れ物があるから鳥渡待つてくれ。』といつて、急いでボーイを救ひ出して來たのです。

有村「そして自分は船に殘つて、船と共に沈んで了つたのですか。

匹田「さうです。

有村「實に立派な人格者ですね。

匹田「船長なんてものは船頭の親方みたいな者だが、偉い奴がゐたもんです。

欽次郎「北海丸に限らず、沈没なんて時はいつも船長は立派な行爲をやりますね。

有村「私たちから見ると、人のやれないことをやつた樣に思へますが、船長自身にとつては、あれが自分のやる當り前

のことだつたのでせう。

匹田「いや、その當り前のことがなか〳〵やれないのだ。偉い人といふのは大きな爲事をやつた人ではない。爲すべきことを敢然として爲した人だ。

有村「さうもいへますね。

匹田（時計を出して見て、）「これは長話をしました。私は外へ廻らなくつちやならない。

欽次郎「お歸りでございますか。

匹田「御病人をお大事に。

有村「有り難うございます。

匹田中央の戸口から表へ去る。

欽次郎（兄のところに進み寄る。）「兄さん、やつゝけませう。

有村「やつゝけるとは。

「さうもいへますね」

御病人　恒太郎の妻昌子。

欽次郎「仔蟹を混入することです。

電報配達夫が「電報。」と叫んで電報をおいて行く。有村、電報を開いて見る。顔に不安の色が動く。

欽次郎「どこから來たのです。

有村「英國だ。（電報を弟に渡す。）

欽次郎（電報を見て、）「急ぐから期日を違へないやうにつてんですね。

有村「さうだ。

欽次郎「兄さん。愈やつゝけるより外ないぢやありませんか。

有村（無言、首を垂れてゐる。）

欽次郎「二十萬罐を八十日でやつて了ふには、どうしても、日に三千宛製罐しなくつちやなりませんからね。兄さんのやうに、これを使つちやいけないの、あれを入れちやいけな

いのといつてゐたら、迚もその半分も出來やしませんよ。

有　村（無言。）

欽次郎「少し品が落ちたつて期日さへ違へなかつたらいゝぢやありませんか。兄さん、もう考へてゐる時ぢやありませんよ。どん〳〵運ばなくつちや。

有　村（敢然と立上り）「よし、やらう。

欽次郎「さうですか。それでわたしも安心した。

有　村「おい欽次郎、店の者を直ぐにアラカイにやつてくれ。

欽次郎「何ですつて。

有　村「もう爲方がない。いくら高くつてもアラカイの蟹を買ふより外はないぢやないか、約束した船の方はとても引取れる望がないんだから。

欽次郎「兄さん、それは正氣の沙汰ですか。

有　村「何だつてそんなことをいふんだ。

欽次郎「そんなことをしたら此の家はどうなるんです。少し位の損なら忍べますが、兄さんのいふやうなことをしたら此の家は立つてはいきませんよ。

有　村「わたしは契約に背いて悪い品を送ることは出來ないのだ。

欽次郎「併し家を破産させても關はないんですか。

有　村「おい欽次郎、潔く討死しようぢやないか。今度のやうにかう四圍の事情が悪くつちや、どうにもしやうがない。併しこれつきりぢやない。まだ秋の漁期もある。翌年もある。翌々年もある。それ迄にはきつと恢復がつけられるから。

欽次郎「さう旨くいくもんですか。殊に兄さんのやうな遣り口ぢや。

有村「わたしはお前によくいつてゐたぢやないか。本當の商業は戰鬪と同じやうに、場合によつては自ら進んで死をも損失をも辭せないものでなくてはならないつて。さうだ。昨夜沈沒した北海丸がいゝ例だ。お前が若しあの船の船長だつたら、お前はあの際どういふ處置をとる。

欽次郎「無論あの船長と同じやうにやります。

有村「此の有村の店は丁度今沈沒しかけてゐる汽船ではないか。そして私とおまへとはその船長だ。

欽次郎「沈沒する時はわたしは無論あの船長に劣らないつもりです。併しそれは最後の瞬間のことです。今船はまだ沈沒はしやしません。沈沒しない前に死を急ぐのは、無智な自殺者が死場所を探してゐると同じです。

有村「お前は暗礁に乘上げてゐても、まだ危險に氣がつかないのか。

欽次郎「船を沈める事は船長の務ではありません。船を浮かび揚らせる事が、船を進行させる事が船長の第一の務です。

有村「水が甲板を浸しても、お前はまだそんなことをいつてゐるのか。お前は船長としての明察がない、船長としての資格がない。

欽次郎「或はさうかもしれません。併し沈める事はいつでも出來ます。わたしは是非浮かび揚らせたいのです。船も助り、船員も助り、そして私も助りたいのです。

有村「それは誰だつてさう思はないものはない。併し船が沈みかけてゐる時、そんな蟲のいゝことをいつてゐたら、自分許りか凡てのものを失はなければならない。それこそ救ふべからざることが出來する。

欽次郎「いゝえ、確かに助ります。たゞそれには兄さんの頭さへ變つてくれゝばいゝんです。

奥で赤ん坊の泣聲がする。

欽次郎「あゝ、あの聲が聞えませんか。兄さん、あなたは子供を飢ゑさしても關はないんですか。

有　村（無言、首を垂れる。）

欽次郎「嫂さんは長いこと寢てゐる。その病人の寢てゐる家をなくして了つてもかまはぬと、あなたはいふんですか。

有　村「いや、家内のことは……。

欽次郎「まあお聽きなさい。嫂さん許りぢやありません。妹にしたつてさうです。妹は上の學校に行きたいのですけれど、事情が事情だから、女學校だけで止めにして、家の手傳をしてゐるぢやありませんか。そして若い娘にも似合はず、

「泣聲」の劇的効果。

妹　恒太郎・欽次郎の妹絢子。

襷掛けでせつせと働いてゐるのはなんの爲です。家を大事だと思つてゐるからぢやありませんか。またわたしだつてさうです。兄さんの前だが、わたしは家の雇人より先に起きて、夜も遲くまで働いてゐます。嫁をと言つてくれる人もありますが、もう少し、もう一辛抱、もうちつと家が樂になつてからと思ふものですから、未だに貰はないでゐるんです、誰にしたつて家を思はないものはありません。そして働いたお蔭には漸く運が向きかけて來たんです。その今一息といふ所へ來て、兄さんのやうな事をいひ出されては、わたしは働き甲斐がなくなつて了ひます。

有　村「そりやお前達には本當に濟まない。

欽次郎「誰だつて、あゝ金が溜つて行く、今月はいくら殘つた、來月はいくら儲かると、さう思へばこそ働く氣にもなれる

んです。損する爲なら、わたしは働く事はもう御免です。

有　村「お前のいふ事にも無理はない。併し商人の務は儲けるばかりが能ではない。そこをよく了解してくれなくつちや困る。

欽次郎「それで家族はどうするんです。

有　村「たとへ子供が飢ゑてゐるとしても、不正な金で、わたしは乳を呑ませたくない。契約を誤魔化した金で、家族のものを養ひたくない。正しいことをして貧乏をするなら、爲方がないぢやないか。これは家族のものも屹度我慢してくれるに違ひない。

欽次郎（稍興奮して）「あなたは縁の遠い外國人の信用を落さない爲に、近い身内のものを滅すのですか。家の者には飯を食はせなくても、他人には見えを張らうといふのですか。

有　村（これも興奮して）「見えなぞぢやない。また遠いとか近いとかの問題ではない。唯しなければならないことをするだけのことだ。

欽次郎「破産は、しなければならないことではありません。しないやうにするのが正當です。

有　村（愈激して）「極つたことだ。而もそれをせねばならぬ破目に陷つてるのではないか。さうするのが正しいことなら、爲方がないぢやないか。

欽次郎（烈しく）「破産しなくつて濟むものを、わざ〳〵破産するなんて、それが何で正しいのだ。肉親のものを痛めるのが何で正當だ。

有　村「お前はまだそんなことをいつてゐるのか。

欽次郎「兄さんこそ考へて下さい。

「唯しなければならないことをするだけのことだ」

有　村「考へ直さなけりやならないのはお前の方だ。

欽次郎（侮蔑的に）「馬鹿正直にも程があらあ。

有　村（聞きとがめて）「なに。

欽次郎「何が何です。

有　村「貴様こそ何だ。

二人殺氣立つて摑み合ひを始めようとする。

罐詰工、製造場から出て來る。

罐詰工「どうしたもんでせう、旦那。釜が煮立つてゐるんですが。

有　村「よろしい。今大蟹を取寄せるから、そんなことは心配しないでいゝ。

罐詰工「外から蟹が來るんですか。

有　村「さうだ。おい、そちらに店の者がゐないか。直ぐにこゝに來るやうにいつてくれ。

罐詰工「へえ、畏りました。（去る。）

欽次郎「ぢや兄さん、どうしてもやるんですか。

有　村「外に手段がないぢやないか。

欽次郎「兄さん、どうかもう一度考へ直して下さい。

有　村「もう考へ盡くした事だ。これ以上考へる餘地はない。

欽次郎（捨てばちに）「こんなことになるんなら、賠償金を拂ふ方が餘つ程增しな位だ。

有　村「商人の本務は契約を守ることだ。品物を支給することだ。たゞそれだけだ。損害金を出すことぢやない。

店の者入り來る。

店の者「何か御用ですか。

有　村「うん。おい十吉、お前すぐアラカイへ行つてな、いひ値通りでいゝから直ぐに蟹を屆けてくれつて、さういふんだ。

「商人の本務は契約を守ることだ」

雇人二「畏りました。

有　村「急いで行つて來い。

雇人二「へえ。（直ぐに表へ駈出す。）

有　村「それから倉次郎と富三は二三日來製造した品の悪い罐詰を選り分けろ。

二　人「へえ、あの別にしちまふんですか。

有　村「さうだ。よく氣をつけてな。

二　人「畏りました。（製造場に這入つて行く。）

有　村「それから定吉、お前は犬橇の用意をして。

雇人四「へえ。（直ぐに去る。）

表では雪の上を走る喜ばしさに、犬が跳り上るので、その度に橇の鈴がちやりん〳〵と鳴る。やがて、雇人の定吉が這入つて來る。

雇人四「旦那、橇の用意が出來ました。

有　村「さうか。おい、欽次郎、お前銀行へ行つて預金を引出して來てくれないか。さうして……。

欽次郎「今日は御免を蒙りませう。わたしは今は働く氣がありませんから。

有　村「さうか。ぢやわたしが行つて來よう。（金庫から銀行の預金帳を出す。）

有　村（欽次郎に）「ぢや行つて來るからな。ずつとアラカイから外の方へも廻るつもりだから、少し遲くなるかもしれない。おい欽次郎、氣を直してくれなくちや困るよ、え。

「さうか……」

「え」

さういひながら、有村は表へ出て、橇に乘つて出掛けて行く。犬橇の勇ましい鈴の響が暫くの間聞える。欽次郎は默然として煖爐の傍に腰を掛けてゐる。（下略）

（山本有三「生命の冠」）

「鈴の響」

山本有三　本名勇造。栃木縣の人。早稲田大學講師。

アポロ

九　昭和時代

世界の文化史を繙いて、その純正と莊嚴とに胸を打たれたのは、蕞爾たる希臘半島に生活した古代希臘人の文化の偉大瑰麗であつたことである。史家は、「凡てのものに於て、中庸を得んことは希臘人の理想であつた。」といつた。この中庸の德こそは、彼等が生活の原則であつて、これを建築・文藝に表はし、更に運動競技・政治にも用ひたのである。

この中庸好みは、すべての誇張・極端・奇矯を嫌忌し、單純・調和・晴朗を愛好して完璧なるものを作り出すことがその理想であつた。されば希臘人は、羅馬人や支那人の如く、壯大なる伽藍を作りて人目を峙てんことを志さずして、小規模なる神殿の建築に、精神の一切を傾け、小さき花瓶に永遠の生

凡てのものに於て云々　ヴアン・ルーン著「世界史」に出づ。

命を刻み込むことに專念したのである。彼等は、物に役せられば志を喪ふことを知り、專ら單純を求めた。故に單純は又希臘文化の著しい特色となつた。波斯・埃及・バビロンの影響の中に在つて、しかもそれ等を統一して簡素にし、その中に永遠不死の高貴を含めることがその理想であつた。

飜つて我が國民の古代生活を見るに、印度の煩瑣なる佛教も、支那に起つた儒教も、繪畫も建築も、大和島根に渡り來つては單純化せられたことの著しきに驚かざるを得ない。我が文藝が、如何に單純なる表現法の中に萬斛の熱情を盛らんとしたか、我が國民生活が、古來如何に簡素單純を以て一貫したかを見れば、その物心兩界に亙る單純好みこそは、眞に我等の誇るべき一大德操ではあるまいか。

諸外國を旅して祖國に歸るや、驚異と喜悅とを禁ずる能

はざるものは、我が國民が中庸を好む心の強烈なることである。平凡の中に深刻を藏し、目前の相に永遠を收めんとする我等の傳統的情操は、極端・誇張を惡德として排斥するのである。我が國民が三千年來、不思議なる國民生活を持續して來たことは、職としてこの中庸の德操と單純好みの性情とに由るのである。かくの如く我が國民と希臘人とが、人生觀照の根本的態度を單純好み中庸好みに基礎づけてゐることは、期せずして東西相應じたものといはねばならぬ。

我等は調和なきところに不幸を感ずる故に、自己一人の幸福のみを求めずして、社會全體の幸福を追求する。それは、社會と稱する全體の調和ある環境の中に於てのみ、個人は眞實の幸福を發見するからである。自己といふことを考へる前に、自己と家庭、自己と社會、自己と國家、自己と全宇宙と

「中庸の德操と單純好みの性情」

の關係に於て自己を考へるのが、我が國民の慣習である。我我は遠く海外の個人主義の熾烈なる國々に遊ぶ時、この中庸好み調和好みの美しさを意識して、故國に一入の懷かしみを覺ゆるのである。かくの如く平和を樂しむ我が國民には、その個人的思索に於ても、國家的活動に於ても、急激・極端・複雜・亂雜・誇張・慘酷なることはあり得ない。若し然るものがあるとすれば、それは一時の變態か、乃至は一部分の人の迷妄である。この意味に於て、我が國民生活は、世界にその比を見ざる理想的生活であるといはねばならぬ。然るに、現在の我が社會生活を亂調・亂諧ならしめんとしつゝあるものがある。狹小なる領土には包容し切れないほど增加しつゝある人口の問題である。更に精神的方面を觀察すれば、明治・大正を通じて入り來つた西洋文明の潮流が、餘りに急激であ

り、色彩が餘りに華麗であつたために、我が國民の思想がその平均を破られんとする現象である。

かゝる物心の兩界に亙る動搖時代に於ては、人間は强烈なる色彩を愛し、喧噪なる音響を好み、極端なる思想を喜び、急激なる言動を壯なりとするのが常である。これを古に徵するに、希臘に於ては、ソクラテスの時代がそれであつた。彼は守舊思想に反對し、他方に過激奇矯を事とする詭辯思想に反對して、左右兩極の思想より烈しい挾擊を受け、終に毒杯を飲むの已む無きに至つたのである。しかし、當年に破れたソクラテスの中庸思想は、遂に永遠の勝利者となつた。支那に於ても、春秋戰國の世、諸子百家の說が橫行し、守舊と過激との兩極端の思想が盛行した時、百代の師表孔夫子が現れて、その穩健中庸の說を提唱したが、當代には容れられず

ソクラテス Socrates. (B.C 469—399) 希臘の哲學者。人倫道德を高唱して詭辯派に對せしが、紀元前三九九年刑に處せられ毒杯を飲みて歿す。

孔夫子 支那の大聖。名は丘、字は仲尼。魯の人。魯の定公に仕へて治績あり、哀公十六年（西紀四七九）歿、年七十三。

して終つた。しかも、その思想は思想的中核となつて永く後世を統率して居るのである。更に革命期の佛蘭西に於ては、ルイ十四世以來の專制政治が、細民の生活を甚しく壓迫したのに對して、急激斬新、人目を一新するが如きルソーの大音響が起つたのである。その時に、「ルソーの學說の勝利は、佛蘭西の國民的幸福を增進するものにあらず、却つて佛蘭西國民はこれが爲に永く窮乏の生活を續くべし。」と叫んで、極力これに反對したのが、チュルゴー等の中庸漸進思想家であつた。惜しいかなチュルゴー等も亦左右兩極端の黨派に挾擊せられて、佛蘭西はルソーの思想を指導原理とする革命に突進して了つた。その結果はミルの言空しからずして、ナポレオンの帝國主義に逆轉するの已むなきに至つたのである。史を繙くものは、常にかゝる事例に逢著して、無限の

ルイ十四世 Louis XIV (1638—1715) フランスの皇帝。內政・外交共に失敗に終り、國民塗炭の苦に陷れり。

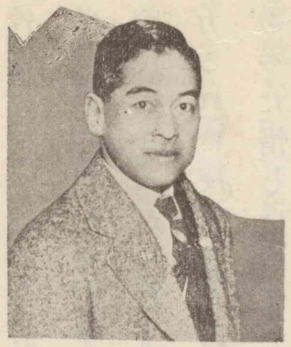
ルソー Rousseau. (1712—1778) フランスの思想家。スキスのゼネバに生れ、フランスに入つて、主情的思想を主張し、その言說はフランス大革命の動因となれり。

チュルゴー Jurgot. (1727—1781) フランスの政治家。後大藏大臣に進む。

ミルの言 「過去を無視する新機軸は必ず反動政策に終る」ミル。Mill. (1773—1836) イギリスの哲學者。

ナポレオン Napoleon. (1769—1821) フランス皇帝。コルシカ島に生る。征露の役に敗れて、セントヘレナ島に流さる。

感慨に打たれるのであるが、決して疑ふを要しない。斯くの如きは何人にも睹易き理法である。しかも易々たるが如くにして最難事であるのは、この中道を歩むことである。中庸の德は、一見人情の常なるが如くにして、これを說くの難き、これを行ふの更に難き、到底想像の外であるからである。中道を歩むものは、常に犧牲者たるの覺悟を要し、中庸の德を實行せんとするものは、常に强固なる意志の力を具ふることを要するのである。



挿繪　鶴見祐輔。

今や昭和の日本は、集中の時代を終つて、再び膨脹の時代に轉囘せんとして、明確なる目標、明白なる思想を吾等に要求してゐる。內、國民的生活の展開を計り、外、國際精神の新理想に基づく新世界の創造の爲に努力しなければならぬ。これこそ我等が當面の急務である。大空に色なく、中道に新奇はない。たゞ人類多數の永遠なる福祉は、常に純一にして中道を歩むを愧ぢざる者の眞摯なる努力の中より生るゝものである。（鶴見祐輔の文による）

「永遠なる福祉」

鶴見祐輔　岡山縣の人。明治十八年生る。評論家。

誠は天の道なり。之を誠にするは人の道なり。誠は勉めずして中り、思はずして得。從容として道に中る。聖人なり。之を誠にするは、善を擇んで固く之を執るものなり。

（中　庸）

誠者天之道也。誠レ之者、人之道也。誠者不レ勉而中、不レ思而得。從容中レ道、聖人也。誠レ之者、擇レ善而固執レ之者也。

中庸　四書の一。もとは禮記中の篇名。

一〇 一茶文抄

おらが春

昔、丹後の國普甲寺といふ處に、深く淨土を願ふ上人ありけり。年の始は世間祝をしてさゞめけば、我もせむとて、大晦日の夜、一人使ふ小法師に手紙認め渡して、翌の曉にしかじかせよといひ敎へて、本堂に泊りにやりぬ。小法師は、元日の旦、未だ隅々は小暗きに、初鷄の聲と同じくがばと起きて、敎の如く表門を丁々と叩けば、内より「いづこより。」と問ふ時、「西方彌陀佛より年始の使僧に候。」と答ふるより早く、上人裸足にて踊り出で、門の扉を左右へさつと開き、小法師を上座に請じて、昨日の手紙をとりて、恭しく戴きて讀みて曰く、「それ世界は衆苦充滿に候間、早くわが國に來るべし。聖衆(しやうじゅ)出迎ひして待入り候。」と讀み終りて、おう〳〵と泣かれけるとかや。

普甲寺 昔、京都府與謝郡の普甲山にありしといふ寺。

聖衆 極樂に在る諸菩薩をいふ。念佛行者の臨終には、阿彌陀佛がこれ等の聖衆を遣はして、極樂國土に迎へ入るといふ。

この上人自ら企み拵へたる悲みに、自ら歎きつゝ、初春の淨衣を搾りて、滴る涙を見て祝ふとは、物に狂へるやうながら、俗人に對して無常を演ぶるを禮とすと聞くからに、佛門に於ては祝の骨頂なるべし。それとは聊か替りて、おのれらは俗塵に埋れて世渡る境涯ながら、鶴龜に比へての祝ひ盡しも、厄拂の口上めきて、空々しく思へば、から風の吹けば飛ぶ屑家は、屑家のあるべきやうに、門松立てず、煤掃かず、雪の山路の曲りなりに、今年の春もあなた任せになむ迎へける。

めでたさも中位なりおらが春

こぞの夏、竹植うる日のころ、うきふししげき浮世に生れたる娘、ものにさとかれと、名を「さと」とよぶ。ことし、誕生日祝

竹植うる日 陰暦五月十三日。この日竹を植うれば、よく繁茂すといふ。竹酔日。

ふころほひより、てうち〳〵あはゝ、天窓てん〳〵、かぶりかぶり振りながら、同じき子どもの風車といふ物もてるを、しきりにほしがりてむづかれば、とみに取らせけるに、やがて、むしや〳〵しやぶつて捨て、露ほどの執念なく、直に外の物に心うつりて、そこらにある茶碗を打破りつゝ、それも直に倦みて、障子の薄紙をめり〳〵むしるに、「よくした、よくした。」とほむれば、誠と思ひ、けら〳〵と笑ひて、ひたむしりにむしりぬ。心のうち一點の塵もなく、名月のきら〳〵しく清く見ゆれば、なか〳〵に心の皺を伸ばしぬ。又、人の來りて、「わんわんはどこに。」と言へば犬に指さし、「かあ〳〵は。」と問へば烏に指さすさま、口もとより爪先まで愛敬こぼれて愛らしく、春の初草に胡蝶の戯るゝよりもやさしく覺ゆ。

折から門に月さしていと涼しく、外にわらべの踊の聲の

すれば、直に物投げすてて、片ゐざりにゐざり出でて、聲をあげ、手眞似して、うれしげなるを見るにつけ、何時しか、かれをも振分髪のたけになして、踊らせたらむには、二十五菩薩の管絃よりも遙かにまさりて、興あるわざならむと、わが身に積る老を忘れて、憂さをなむ晴らしける。

かく日ねもす、をじかの角の束の間も、手足を動かさずといふことなくて、遊び勞るればにや、朝は日のたくるまで眠る。そのうちばかり、母は飯炊ぎ、そこら掃き片づけて、やがて閨に泣聲のするを、目の覺むる相圖と定め、手かしこくも抱き起して、乳房あてがへば、すは〳〵と吸ひながら、胸板の邊を打叩きて、にこ〳〵笑ひ顔を作るに、母は、長き胎内の苦みも、日々の襁褓の穢はしきも打忘れて、衣のうらの玉を得たるやうに、撫でさすりて、一人悦ぶなりけり。

二十五菩薩 阿彌陀佛の左右に侍する二十五の菩薩。

衣のうらの玉 法華經に出づ。或人友に寶珠を衣裡に入れおかれしを知らず、諸國を流浪して貧苦に艱む。後、前の友に邂逅して衣裡に寶珠の藏めあるを聞き、忽ち貧苦を免るゝを得たりといふ故事。

蚤のあとかぞへながらに添寝かな

みとり日記

六日。天晴れたれば、臥してばかりも退屈にや思しめさんと、夜著うち疊みて寄り懸らせ申したるに、來し方の物語など始め給ひけり。「抑、汝は三歳の時母に後れ、やゝ長くるにつけても、後の母との中睦まじからず。爲に日々夜々魂を痛め、心の安き時とてはなかりき。ふと思ひけるやうは、一緒にありなばいつまでもかくありなん、一度故郷を離れたらんには、自然親慕はしき事もやあらんと、十四歳といふ春、はるばる江戸へとは赴かせたりき。あはれ餘所の親は、今三とせ四とせ過ぎたらんには、家を任せ、汝にも安堵せさせ、我等も行末を樂しむべきに、年はもゆかぬ痩骨に荒奉公せさせしを、つれなき親とも思ひしならん。皆これ宿世の因縁と諦めよや。我も一たびは江戸に立越えて汝にめぐり逢ひ、相果てんにも汝が手を借らんと思ひしに、この度はるゞゝと歸り來れる汝に、かゝる看病を受くるこそ淺からざる縁なれ。今は往生遂げたりとも何の悔かあらん。」と、はら〳〵と涙を落し給ふに、我は唯うち伏して物をもえいはず。夏も消えやらぬ富士の雪より厚く、紅の色より深き父の恩を、側に附き添ふこともならで、唯浮かめる雲の如く、東にあるかと思へば西に漂ひて、はや今年にて二十五年にもなりぬ。頭は白き霜を戴くまで親の側を遠ざかりぬること、五逆罪といふともこれに過ぎなんやと、心に伏し拜み、われ涙を落しなば、病いよ〳〵重らせ給ふべしと、顔おし拭ひてうち笑ひ、「さる事、心に思ひ給はで、はや〳〵快氣なし給へ。」と藥をすゝめ、「やがて健かになり給はば、我も元の彌太郎となり、草刈り土掘りて

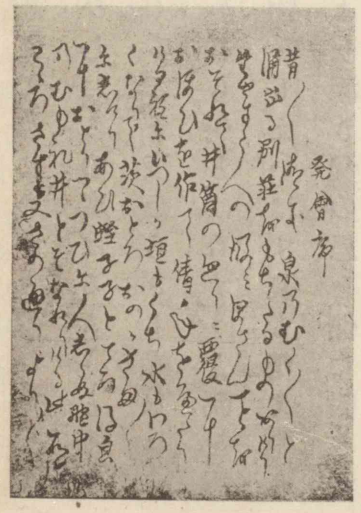
六日 享和元年(二四六一)五月。一茶時に年三十九。

物語など始む 一茶の父が物語るなり。父は柏原にて農を業とす。名は彌五兵衛。

五逆罪 佛經に、「殺レ父、殺レ母、殺二阿羅漢一、破二和合僧一、出二佛身血一」とあるなり。

御心を安んじ参らすべし。今までの體たらく許させ給へ。」といへば、父は限りなく喜び給ひぬ。

八日晴。田休みなればとて、所縁あるも所縁なきも、聞傳へ語り傳へて、訪ひ來る人も多かり。父が好物なりとて、酒もて來る人もあり、蕎麥粉もて來るもあり。父は喜ばしげに首を擡げ、手を合はせて、ほど〳〵に會釋し給ひぬ。「身後黄金北斗をさゝふとも、如かじ生前一杯の酒」と、唐も大和も人の情等しく、亡き後にて佛事供養美々しく盡くしたらんより、存命のうちの優しき言葉には增さらじ。今は世降りて、他の一寸の歪は咎めて、おのれが一尺のひがみは見えず、萬



身後云々 白氏文集に「身後堆レ金拄二北斗一、不レ如二生前一杯酒一。」

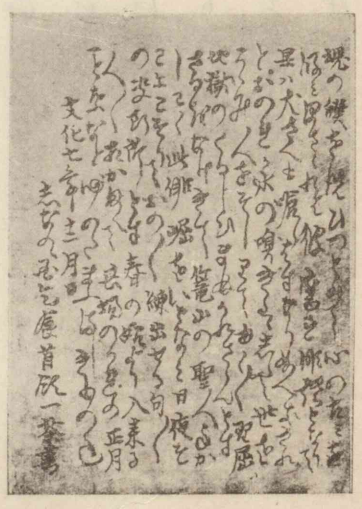
發會序

昔〳〵、清き泉のむく〳〵と涌出る別莊をもちたるものありけり。たやすく人の汲みほさんことをおそれて、井筒の廻りに覆におほひを作て倩年をへたりける程に、いつしか垣もくち、水もわろくなりて、茨おどろおのがさま〴〵にしげりあひ、蛭子子ところ得貞におどりつゝ、つひに人しらぬ野中のむもれ井とぞなりける。此道こゝろざすも又さの通り、より〳〵

づうしろめたき勝にて、我が身不孝なりと思へる人だになし。

うけがたき人と生れてなよ竹のすぐなる道に入るよしもがな

この夜は子一つの頃より寐られねば、夜長うおぼして、「まだ夜は明けぬか、雞の啼かざるか。」と、我に聞き給ふこと三度、四度、七度、九度に及べども、たゞ星あかりのみにして、軒のつまの樅・楓の樹かげ、其處に彼處に暗く、梟の夜更をうたふばかりなり。あはれ鷄の空音をつくりて、關の戸を開きしためしはあれど、火を袋に入るゝ幻術は知らず、入日を返す勢はたあらねば、たゞ燈火をかゝげ寢顔を守りて、空しく天明を



魂の饌を洗ひ、つとめて心の古みを汲みほさゞれば、彼腐き俳諧となりて、果は犬さへも喰らはずなりぬべき。されどおのれが水の嗅きはしらで、世をうらみ人をそしりて、ゆく〳〵理屈地獄のくるしびまぬかれざらんとす。さるをなげきて籠山の聖人、手かしこく此俳諧をいとなみ、日夜そこにこぞりて、おの〳〵練出せる句〳〵の決斷所とす。春の始より入來る人〳〵、相かまへて其場のがれの正月こと葉など必のたまふまじきもの也。文化七年十二月　日　しなのゝ國乞食首領一茶書

子一つ 夜の十二時頃。

鷄の空音 史記孟嘗君傳に「昭王釋二孟嘗君一、出至二函谷關一、關法鷄鳴出レ客、客有下爲二鷄鳴一者上、鷄悉鳴、於レ是開レ關出レ之。」

入日を返す勢 淮南子に「魯陽公與レ韓構レ難、戰酣、方暮、援レ戈而撝レ之、日爲反三舍。」

待つばかりなり。

十日晴。頻りに梨の實をたうべたしとむづかり給へば、このあたりの所縁あるも無きも、親しき限り、富みたる家、心當りある門、聞き盡くし尋ね探し盡くすといへども、一つだに貯へたる人とてなく、夏さへ寂しき山里なり。今日はわけて宣ふなれば、善光寺へ往きてみんと、曉に支度して門を出でけるに、皐月の空ほの〴〵晴れて、白雪はた山にあり。青葉隱れの花は春を殘して、種蒔の山入など懷かしく、時鳥の一聲もこよなく時めく空なるに、あやしく心の晴れぬ曙なりけり。卯の下刻、牟禮といふ驛に至る。今は二十四年の昔、われ江戸へ赴きける日、父の見送り給ひし里なれば、川の音、阪の影も仄かに心覺えありて、何となく嬉しけれど、人は知らぬ顔のみとなりけり。急ぎければ、辰の刻ばかりに善光寺に著く。醫師の家はまだ朝飯頃と見えて、主人の聲も聞えければ、具さに病のさまを語りけるに、やがてから樫の匙取りつゝ、御藥合はせて給ひたり。そも〳〵この地は御佛の淨土にしあれば、肆は軒をあらそひ、幌は風にひるがへり、入る人出づる人、國々よりはる〴〵歩を運びて、未來の成佛を願はぬ人なし。おのれは今日父の命を受けて、御藥づかひ、はた梨さがしに來つるなれば、この役濟まざらんうちはと、御佛も遙拜して、天を翔り地を潛りてなりとも、梨一つ得まほしく、ある程の乾物店、ある程の青物店を、足を空にして驅けめぐるに、悲しきは、さらに片割一つありといふ人もなし。昔雪中に筍を掘り、氷上に魚を求めしためしもあるに、皇天我を捨て給ふかや、佛神我を見限り給ふかや、一世ばかりの不孝にはあらじ、父はさぞ梨を待ち居給はん、この儘に歸りて父を何と

善光寺 今の長野市に名刹善光寺あり。柏原より約三一粁。

種蒔の山入 離れたる山に小屋掛などして、農事にいそしむなり。

卯の下刻 今の午前七時頃。

牟禮 上水内郡牟禮村。

肆 商店なり。

幌 店の掛暖簾の類。

雪中に筍を掘り 吳志に「孟宗母嗜レ筍、冬節將レ至、筍尚未レ生、宗入二竹林一哀歎、而筍爲レ之出、以供レ母。」

氷上に魚を求め 晉書に「王祥性至孝、繼母朱氏不レ慈、而祥愈恭謹、父母疾衣不レ解レ帶、湯藥必親嘗、母嘗欲二生魚一時天寒水凍、將二剖レ氷求レ之、氷忽自解、雙鯉躍出。」

吉田 上水内郡吉田村。

八つ 午後二時頃。

高田 今の新潟縣高田市。柏原より約八十粁。

か慰めんと思へば、胸塞がりて、落つる涙は大道を潤すに、往來の人の狂者と笑はんも恥かしく、暫く手を組み首をうなだれて、心をぞ靜めける。無き物はいかにせん、唯一足も早く戻りて、藥を進め奉らんと、手を空しうして吉田といふ里に來つるに、樹立の山鴉三つ四つ、我を見ては聲をたつるに、何となく父の身の上の心にかゝり、息もつきあへず足を早むる程に、日影は八つ時といふ頃宿に戻る。父はいつもより顏うるはしく笑みを含み給ふに、梨の事を語らば、又もや氣を落し給はん、とやせんかくやせんとためらふに、父の問ひ聞き給へば、ありのまゝを答へ、高田に往きて求め來り參らすべしと、白雲のよすがも知らぬ根無し言を申して父を宥め奉りぬるは、いと本意なき夕べなりけり。

（小林一茶の文による）

小林一茶 信濃の俳人。通稱彌太郎。俳諧寺と號す。寶暦十三年、柏原に生る。幼にして母を失ひ、繼母の爲に家を嗣ぐ能はずして、江戸に住むこと十餘年。身を俳諧に委ぬ。性偏僻、王侯貴顯と雖も屈せず。文政十年歿、年六十五。滑稽諷刺の句を以て稱せらる。（二四二三—二四八七）

めでたさも中ぐらゐなり
おらが春

寢がへりをするぞ脇よれ
きりぐ〳〵す

やれ打つな蠅が手をする
足をする

やせ蛙負けるな一茶是に
あり

明月を取つてくれろと泣
く子かな

雀の子そこのけ〳〵御馬
が通る

大根引大根で道を教へけ
り

あばら骨なでじとすれど
夜寒哉

二 日野山の閑居

こゝに六十の露消えがたに及びて、更に末葉の宿りを結べることあり。いはば旅人の一夜の宿を造り、老いたる蠶の繭を營むが如し。これを中頃の住家になずらふれば、また百分が一にだにも及ばず。とかくいふほどに齡は年々にかたぶき、住家は折々に狹し。その家のさま世の常ならず。廣さは僅かに方丈、高さは七尺が内なり。處を思ひ定めざるが故に、地を占めて造らず。土居を組み、打覆を葺きて、繼目毎に掛金をかけたり。もし心に適はぬことあらば、易く外に移さむが爲なり。その改め造る時、幾ばくの煩かある。積むところ僅かに二輛なり。車の力を報ゆる外は、更に他の用途いらず。

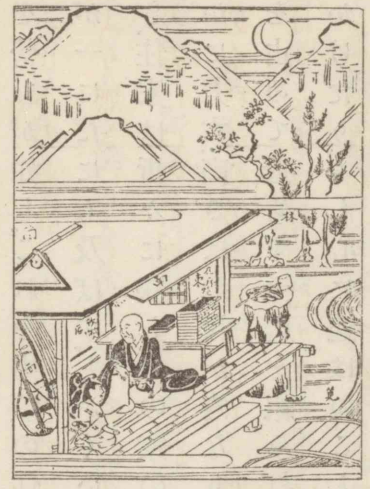
いま日野山の奥に迹を隱して後、南に假の日がくしをさ

參考資料

方丈記 一卷。鴨長明の隨筆。日本文學史上の哲學的冥想的試論として徒然草と並立すべき貴重なる文獻なり。

日野山 京都府宇治郡醍醐村。

し出して、竹の簀子を敷き、その西に閼伽棚を作り、内には西の垣に沿へて阿彌陀の畫像を安置し奉りて、落日を受けて眉間の光とす。かの帳の扉に、普賢ならびに不動の像を掛けたり。北の障子の上に小き棚を構へて黑き皮籠三四合を置く。すなはち和歌・管絃・往生要集ごときの抄物を入れたり。傍に箏・琵琶各一張を立つ。いはゆる折箏・つぎ琵琶これなり。東にそへて蕨のほどろを敷き、つかなみを敷きて夜の床とす。東の垣に窓をあけて、こゝに文机をいだせり。枕のかたに炭櫃あり。これを柴折りくぶるよすがとす。庵の北に小地を占めて、あばらなる姫垣をかこひて園と



挿繪　假の庵（古本方丈記より）。

往生要集　六卷。源信滋都の著。淨土念佛に歸依すべきことを勸めたるもの。

折箏・つぎ琵琶　共に、用ふる時に接合はせて彈ずるやうに出來たるなり。

蕨のほどろ　蕨の穗の長く延びたるもの。

つかなみ　藁を編みて作れる敷物。

すすなはちもろ〳〵の藥草を植ゑたり。假の庵のありさまかくの如し。

その處のさまをいはば、南に筧あり。岩を疊みて水を溜めたり。林軒近ければ、つま木を拾ふに乏しからず。名を外山といふ。正木の葛迹を埋めり。谷繁けれど、西は晴れたり。觀念のたより無きにしもあらず。春は藤浪を見る。紫雲の如くして西の方ににほふ。夏は時鳥を聽く。語らふごとに死出の山路を契る。秋は蜩の聲耳に滿てり。空蟬の世を悲しむかと聞ゆ。冬は雪をあはれむ。積り消ゆるさま罪障に喩へつべし。

もし念佛ものうく、讀經まめならざる時は、自ら休み、自ら怠るに、妨ぐる人もなく、また恥づべき友もなし。殊更に無言をせざれども、ひとり居れば口業修めつべし。必ず禁戒を守るとしもなけれども、境界なければ、何につけてか破らむ。も

外山　日野の山中に、今なほあり。

紫雲　佛・菩薩が來迎の時に乘るといふ雲。

し迹のしら波に身を寄する旦には、岡の屋に行きかふ船を眺めて滿沙彌が風情をぬすみ、もし桂の風、葉をならす夕べには、潯陽の江を思ひ遣りて源都督の流れをならふ。若し餘りの興ある時は、しば〳〵松のひゞきに秋風の樂をたぐへ、水の音に流泉の曲をあやつる。藝はこれ拙けれども、人の耳を喜ばしめむとにもあらず。ひとり調べ、ひとり詠じて、自ら心を養ふばかりなり。

また麓に一つの柴の庵あり。すなはち山守が居るところなり。かしこに小童あり。時々來りてあひ訪ふ。若しつれ〴〵なる時は、これを友として遊びありく。彼は十六歳、我は六十。その齡ことの外なれど、心を慰むることは、これ同じ。或はつばなを拔き、岩梨を採る。又ぬかごをもり、芹を摘む。或はすそわの田居にいたりて落穗を拾ひてほぐみを作る。若し日う

迹のしら波　「世の中を何にたとへむあさぼらけこぎ行く舟のあとの白浪」（滿誓沙彌）

岡の屋　京都府紀伊郡。宇治川の東岸。

滿沙彌　滿誓沙彌。右大辨笠麻呂。養老五年出家。

潯陽の江　「潯陽江頭夜送レ客、楓葉荻花秋瑟々。」（白樂天）

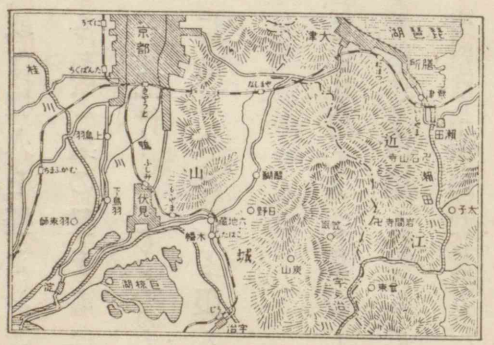
源都督　桂大納言源經信。琵琶の名手。承德元年（一七五七）歿、年八十二。

秋風・流泉　ともに琵琶の曲名。

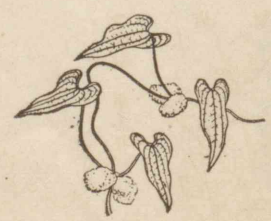
つばな　茅の花。

岩梨

らゝかなれば、嶺に攀ぢのぼりて、遙かに故郷の空をのぞみ、木幡山・伏見の里・鳥羽・羽束師を見る。勝地は主なければ、心を慰むるにさはりなし。歩みわづらひなく、志遠くいたる時は、これより嶺つゞき、炭山を越え、笠取を過ぎて、岩間にまうで、石山を拜む。もしは又粟津の原を分けて蟬丸の翁が迹をとぶらひ、田上川を渡りて猿丸大夫が墓をたづね、歸るさには、をりにつけつゝ櫻を狩り、紅葉をもとめ、蕨を折り、木の實を拾ひて、かつは佛に奉り、かつは家苞にす。もし夜靜かなれば、窓の月に古人をしのび、猿の聲に袖をうるほす。草むらの螢は遠く槇の島のかゞり火にまがひ、曉の雨はお



ぬかご　自然薯などの蔓になる小薯（左挿繪參照）。



勝地　「勝地本來無二定主一。大都山屬二愛レ山人一。」（白樂天）

岩間　滋賀縣滋賀郡石山村の正法寺の觀音。

石山　同郡石山寺の觀音。

のづから木の葉吹く嵐に似たり。山鳥のほろ〳〵と鳴くを聞きても、父か母かとうたがひ、峯のかせぎの近く馴れたるにつけても、世に遠ざかるほどを知る。或は埋火を掻きおこして、老の寢覺の友とす。恐ろしき山ならねど、梟の聲をあはれむにつけても、山中の景色をりにつけて盡くることなし。況や深く思ひ、深く知れらむ人のためには、これにしも限るべからず。

おほかたこの處に住みそめし時は、あからさまと思ひしかど、今すでに五とせを經たり。假の庵もやゝ古屋となりて、軒には朽葉深く、土居に苔蒸せり。おのづから事のたよりに都を聞けば、この山に籠り居て後、やむごとなき人のかくれ給へるもあまたきこゆ。まして數ならぬたぐひ、盡くしてこれを知るべからず。度々の炎上に亡びたる家、又いくそばく

山鳥の云々 「山鳥のほろほろとなく聲きけば父かとぞ思ふ母かとぞ思ふ」（僧行基）

峯のかせぎ 「山ふかみなるゝかせぎのけぢかきに世に遠ざかるほどぞ知らるゝ」（西行法師）

埋火云々 「いふこともなき埋火をおこすかな冬のねざめの友しなければ」（堀河百首）

恐ろしき山 「山深みけぢかき鳥の音はせて物おそろしきふくろふの聲」（西行法師）

ぞ。たゞ假の庵のみ、のどけくして恐なし。（鴨長明「方丈記」）

天才の作品は一切を包み、何人もその中に自己の姿を見る鏡である。これに反して能才の作品は何ものをも含まない。たゞ美辭佳句を見るのみである。然るに以上の三種の中間に立つ第三の作品がある。それは熱誠の迸り出でたる作品である。此種の作品は天才の作品のやうにあらゆる人に何ものかを與へるものではない。又能才の作品のやうに利己的消閑的のものでもない。作者の强烈なる信念の發露である。我々がそれを欲すると否とに關はらず我々を動かすものである。方丈記は正にこの種の作品である。（夏目漱石の文による）

鴨長明 通稱菊太夫。蓮胤と號す。後鳥羽院の頃の歌人。歿年不詳。

夏目漱石 名は金之助。大正五年歿、年五十。

一三　茶　境

主客共に世塵のけがれを洗ひ去つて、靜寂の中、相和し相敬し、油然として樂みの心に叶ふとき、之を茶境といふ。

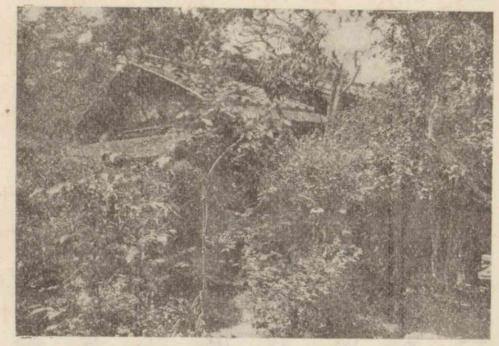
降積みし雪の面白さに、天王寺屋宗久、不時に利休の庵をおとづれた。いまだ曉を催さざるに、門の戸は既に細目にあけられてゐた。案内を乞うて腰掛に至れば、庵をもるゝ名香靜かなる路地に薫つて、その趣一入である。迎へられて席に入れば、已に松風の音さわやかである。閑談暫く時を移す間に、勝手の戸を開く音がして、人のけはひがした。利休は「かゝる晨こそ醒ケ井の水をと思ひ、汲みに遣はせしもののはやく歸り候ひつらん、とてもの事に釜を改めて一服參らせ候べし。」といひつゝ、釜をあげて水屋へ立つた。宗久は爐邊にうち

宗久　今井氏。名は久秀。茶道を武野紹鷗に學ぶ。

利休　千氏。名は宗易。茶道千家流の祖。天正十九年歿、年六十九。（一一八三―一二五一）

醒ケ井の水　滋賀縣阪田郡醒ケ井村に湧出する清泉。

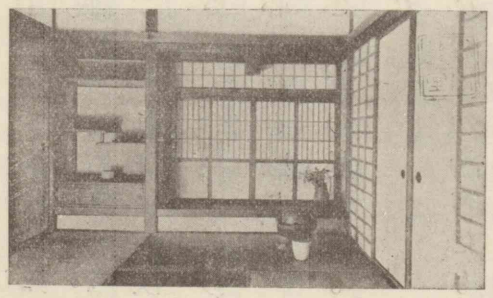
より、炭のながれの見事さにしばし見とれてゐたが、心づいて道幸の内を見ると、仕込んだ炭斗があつた。取出し炭二つ三つさしくべて利休を待つた。やがて水を改め、濡釜として運び出した利休にむかひ、「炭のながれ誠に見事には候ひしかど、いづれ火相を御改めのことと思ひより候まゝ、炭二つ三つさしくべ候。」と挨拶した。利休はその心入れを感じ、かゝる人と茶をしてこそ、雪の晨の味も一入なれ、と喜んだ。



相和相敬の境なれば、勿論客にも客としての働きが大切ではあるが、主人の心づくしが主である丈に、主人の一擧一動には能敬能清の眞がこもつて、茶

挿繪　京都西行庵茶室。

境をして俗事雑境に陷らしめぬ様に心がけ、手前に一點のゆるみのない様につとめねばならない。柳生但馬守が片桐石見守の手前を見て、「尚この境に入り得るか。」と驚かれたといふ事である。身心をねるといふ上から見れば、そのねり上げたものは、劍を持つ手から始めても、茶杓を清むる手から始めても、別に變りのある筈はない。併しこのゆるみのないとは、自らも窮屈になり、客も窮屈にせよといふ意味ではない。主客一點のゆるみのない姿の裡には、共に煩思雑慮の走作を拂つて、主人は客の心となり、客は主人の心となり、主客一如に歸する事をいふのである。煩思雑慮は手前を亂す源である。それを除くために



柳生但馬守　名は宗矩。劍法新陰流の名家。正保三年歿、年七十六。（一二二三—二三〇六）

片桐石見守　名は貞昌。茶道石州流の祖。延寶元年歿、年六十九。（一二六五—二三三三）

挿繪　京都銀閣寺内、東求堂茶室内部。

は練習がいる。その練習の結果、純一無雑の境に悟入し得るのである。茶道で手前の習熟といふのは、運び扱ひ等が機械のやうに出來るといふことではない。心の働きを加へて工夫した結果、和敬清寂に一如たる心身を作り上げることである。主客共に相和相敬し、能清能寂となるのである。

利休の朝顔が見事だと聞いて、紹鷗は拜見を所望した。利休はこの仰せを喜び、日を約して師をその庵に請じた。定日となり、紹鷗その庵に至れば、露地には朝顔の影も形もない。意外の感に打たれつゝ席に入れば、床の花入に咲いた一輪の朝顔が、色も一入あざやかに師を迎へた。紹鷗は床前に坐し、膝を打つて之を賞歎した。利休は凡ての朝顔を刈りつくし、只一輪に迎ふる人と迎へらるゝ人との心づくしを集中して、主客一如の歸結を作り出だしたのである。紹鷗が「この

紹鷗　武野氏。名は仲村。有名なる茶人。弘治元年歿、年五十三。（一一六三—一二一一五）

心入れとても及ぶ所にあらず。」というたのも無理はない。

かく時刻を擇び、形式を異にして工夫せらるゝ茶會で開かるゝ茶境を、器物の飾り付けや案配で事すみたりと思ふのは、主客共に至らぬが故である。一期一會の思ひをやどして、萬事麁末なきやう實意をつくす主人のすゝめに、客も何一つおろそかならぬを感じ、自ら難値難遇の喜びを味ふ時、主客歴然として而も主客一如たる境が開かれる。これを眞の茶境といふ。（奥田正造の文による）

初代の茶人達は鋭くも「下手物」の美に打たれました。その美の中に「道」をすら建てたのです。人々はそれ等を「名器」とあがめます。私は彼等の並々ならぬ眼と心とを慕はしく感じます。（柳宗悅の文による）

奥田正造　成蹊高等女學校長。

下手物　（げてもの）は上手物に對して日常の器具。

柳宗悅　東京帝國大學文科大學出身。美學者。

一三　徒然草抄

ある人法然上人に、「念佛の時眠におかされて行をおこたり侍ること、いかゞしてこの障りをやめ侍らむ。」と申しければ、「目のさめたらむほど念佛し給へ。」と答へられける、いと尊かりけり。また「往生は一定と思へば一定、不定と思へば不定なり。」といはれけり。これも尊し。また「疑ひながらも、念佛すれば往生す。」ともいはれけり。これもまた尊し。

五月五日、賀茂の競馬を見侍りしに、車の前に雜人立ち隔てて見えざりしかば、各下りて、埒のきはによりたれど、殊に人多く立ちこみて、わけ入りぬべきやうもなし。かゝる折に、向ひなる樗の木に法師の上りて木の股についゐて、物見る

徒然草　上下二卷。兼好法師の隨筆を輯む。評論は社會萬般に亙り、論斷の基點は佛教を中心とせり。論理の高尚なる事我が國文學書中稀に見るところなり。

法然上人　名は源空。美作の人。淨土宗の開祖。建暦二年歿、年八十。（一一七九三―一八七二）

行　念佛の行ひを指せり。佛經の語。

往生　往生淨土。

樗の木　せんだん（栴壇）の異名。

ついゐる　「突き居る」の音便。つくばふ。しやがむ。

あり。取りつきながらいたう眠りて、落ちぬべき時に、目を覺すことたびたびなり。これを見る人嘲りあざみて、「世のしれものかな。かく危き枝の上にてやすき心ありて眠るらむよ。」といふに、わが心にふと思ひしまゝに、「われらが生死の到來、たゞ今にもやあらむ。それを忘れてもの見て日をくらす。愚かなることは、なほまさりたるものを。」といひたれば、前なる人ども、「まことにさにこそ候ひけれ。最も愚かに候。」といひて、みな後を見かへりて、「こゝへ入らせ給へ。」とて、所を去りて呼び入れ侍りにき。かほどのことわり、誰かは思ひ寄らざらむなれども、折からの思ひがけぬ心ちして、胸に當りけるにや。人木石にあらねば、時にとりて、ものに感ずることなきにあらず。

しれもの　痴者。

わが心にふと云々　兼好が自分の心にふと思ひ浮かべての意。

生死の到來　佛經にいふ生老病死の四相なり。こゝにては單に、死の到來といふ意。

愚かに候　作者の言葉に感じて、見物の人たち自身にて自分を罵りて謂ふなり。

侍りにき　「にき」は過去完了形。「に」は完了「ぬ」の轉化せるもの。

當りけるにや　當りけるにやあらんの意。

人木石にあらねば　文選の鮑照の詩句に、「人非二木石一豈無レ感。」とあり。

これも仁和寺の法師、童の法師になりむとするなごりとて、おの〳〵遊ぶことありけるに、醉ひて興に入るあまり、傍なる足鼎を取りて、頭にかづきたれば、つまるやうにするを、鼻をおしひらめて、顏をさし入れて舞ひ出でたるに、滿座興に入ること限りなし。しばしかなでて後、ぬかむとするに、大方ぬかれず。酒宴ことさめて、いかがはせむとまどひけり。とかくすれば、頸のまはりかけて、血垂り、たゞ腫れに腫れみちて、息もつまりければ、うち破らむとすれど、たやすく破れず。響きて堪へ難かりければ、かなはで、すべきやうなくて、三足なる角の上に、かたびらをうちかけて、手を引き、杖をつかせて、京な

仁和寺　京都府葛野郡花園村御室にあり。眞言宗の大本山。世に御室と稱ふ。

足鼎　單にかなへともいふ。三本足の鼎を指せり。

挿繪（浮田一蕙筆）鼎かづき。

る醫師のがりゐて行きけるに、道すがら、人の怪しみ見ること限りなし。醫師の許にさし入りて、對ひゐたりけむありさま、さこそ異樣なりけめ。ものをいふも、くゞもり聲に響きて聞えず。「かゝることは書にも見えず、傳へたる敎もなし。」といへば、又仁和寺へ歸りて、親しき者、老いたる母など、枕上に寄りゐて、泣き悲しめども、聞くらむとも覺えず。かゝるほどに、ある者のいふやう、「たとひ耳鼻こそ切れ失すとも、命ばかりはなどか生きざらむ。たゞ力を立てて引き給へ。」とて、藁のしべを、まはりにさし入れて、かねを隔てて、頸もちぎるゝばかり引きたるに、耳鼻缺けうげながら拔けにけり。からき命まうけて、久しく病みゐたりけり。

高名の木のぼりといひし男、人を掟てて、高き木にのぼせ

醫師のがり　「くすし」は「くすりし」の略、醫者のことなり。「がり」は接尾語にて、「許に」の意。

くゞもり　はつきりせぬこと。日本書紀に「渾沌如二鶏子一、溟涬而含レ牙。」とあり。

書にも　醫書にも。

藁のしべ　藁の穗の心、わらみご。

缺けうぐ　「うぐ」は「穴があく」「うつろになる」。今いふ「ほげる」の意。

て梢を伐らせしに、いと危く見えし程は、いふ事もなくて、下るゝ時に、軒だけばかりになりて、「あやまちすな、心して下りよ。」と、詞をかけ侍りしを、「かばかりになりては、飛び下るとも下りなむ。いかにかくはいふぞ。」と申し侍りしかば、「その事に候。目くるめき、枝危き程は、おのれが恐れ侍れば申さず。過はやすき所になりて、必ず仕ることに候。」といふ。あやしき下臈なれども、聖人の戒めにかなへり。鞠も難きところを蹴出して後、やすく思へば、必ず落つると侍るやらむ。

心なしと見ゆるものも、よき一言はいふものなり。ある荒夷のおそろしげなるが、かたへにあひて、「御子はおはすや。」と問ひしに、「一人ももち侍らず。」と答へしかば、「さてはもののあはれは知り給はじ。情なき御心にぞものし給ふらむ」と、いと

軒だけばかり　「たけ」は長さ高さ。「ばかり」は接尾語にて、ほどの意。

下臈　身分の低い者。上臈の對照語。

落つると云々　「落つる」は「落つることだよ」といふほどの意。「侍るやらむ」は「申し侍るにやあらむ」の約言にて「と申しますやうであります」の意。

よき一言　漢書に「智者千慮有二一失一、愚者千慮有二一得一。」また論語に「不二以レ人廢一レ言」とあり。

おそろし。子故にこそ、よろづのあはれは思ひ知らるれ。」といひたりし、さもありぬべきことなり。恩愛の道ならでは、かゝる者の心に慈悲ありなむや。孝養の心なきものも、子もちてこそ親の志は思ひ知るなれ。

世に語りつたふる事、誠はあいなきにや、多くはみな虚言なり。あるにも過ぎて人は物をいひなすに、まして年月過ぎ、境も隔りぬれば、いひたきまゝに語りなして、筆にも書きとどめぬれば、やがて定りぬ。道々の物の上手のいみじき事など、頑なる人の、その道知らぬは、そゞろに神の如くにいへども、道知れる人は、さらに信も起さず。音に聞くと見る時とは、何事もかはるものなり。かつあらはるゝをも顧みず、口にまかせていひ散すは、やがて浮きたる事と聞ゆ。又我もまこと

かゝる者　かやうな恐ろしき者（あらえびす）。
ありなむや　「や」は反語。
孝養　孝行。觀無量壽經に「孝二養父母一奉二事師長一云々」

しからずは思ひながら、人のいひしまゝに、鼻のほどをごめきていふは、その人の虚言にはあらずげに〳〵しく所々うちおぼめき、よく知らぬ由して、さりながら、つま〴〵あはせて語る虚言は、おそろしきことなり。わがため面目ある様にいはれぬる虚言は人いたくあらがはず。皆人の興ずる虚言は、ひとり「さもなかりしものを」といはむも詮なくて、聞き居たる程に、證人にさへなされて、いとゞ定りぬべし。とにもかくにも虚言多き世なり。たゞ常にある、珍しからぬ事のまゝに心得たらむ、よろづにたがふべからず。下ざまの人の物がたりは、耳驚くことのみあり。よき人は怪しき事を語らず。かくはいへど、佛神の奇特、權者の傳記、さのみ信ぜざるべきにもあらず。これは世俗の虚言をねんごろに信じたるもをこがましく、よもあらじなどいふも詮なければ、大方は誠しく

よき人は　「子不二語一怪力亂神一」（論語）

あひしらひて、偏に信せず、また疑ひ嘲るべからず。

達人の人を見る眼は、少しもあやまる所あるべからず。譬へば或人の、世にそらごとを構へ出して、人をはかる事あらむに、すなほにまことと思ひて、いふまゝにはからるゝ人あり。餘りに深く信を起して、猶わづらはしく、そらごとを心得そふる人あり。又何としも思はで、心をつけぬ人あり。又聊かおぼつかなく覺えて、賴むにもあらず、賴まずもあらで、案じゐたる人あり。又まことしくは覺えねども、人のいふ事なればさもあらむとて、やみぬる人もあり。又樣々に推し、心得たるよしして、賢げにうちうなづき、ほゝゑみてゐたれど、つやつや知らぬ人あり。又推し出して、あはれさるめりと思ひながら、猶あやまりもこそあれと、怪しむ人あり。又異なるやう

そらごとを構へ出して　虛言を作り出して。
心得そふる　考へて添へ加へる。
心をつけぬ　氣にかけぬ。
やみぬる人　止めてしまふ人。
つやつや　少しも。一切。

もなかりけりと、手を打ちて笑ふ人あり。又心得たれども、知れりともいはず、おぼつかなからぬは、とかくの事なく、知らぬ人と同じやうにて過ぐる人あり。又このそらごとの本意を、初より心得て、少しも欺かず、構へ出したる人と同じ心になりて、力を合はする人あり。愚者の中のたはぶれだに、知りたる人の前にては、この樣々の得たる所、詞にても、顏にても、かくれなく知られぬべし。まして明かならむ人の、惑へる我等を見むこと、掌の上のものを見むが如し。但しかやうの推し量りにて、佛法までをなずらへいふべきにはあらず。

（吉田兼好）

しやせまし、せずやあらましと思ふ事は、おほやうはせぬはよきなり。（兼好）

おぼつかなからぬは　理解してゐる者は。
掌の上　事の明白・容易なるに喩ふ。孟子に「治二天下一可レ運二之掌上一」となり。
吉田兼好　吉田氏。鎌倉末期の文學者。正平五年歿、年六十八。（一九四三―二〇一〇）

一四　俚諺論

一國の言ひ慣れたる俚諺の內容を深く研究すれば、其の國民の歷史・氣質・風俗・人情・學術・宗教・社會制度等、其の一切の生活と其の生活の理想とに就いて發見する所多々あるべし。此の點において諸國民の俚諺を比較するは、いと興味ある事なり。我が俚諺の中、今卽座に思ひ出づるもの三四を揭げんに、「花は櫻木、人は武士。」といふ美はしき諺は言ふも更なり、「武士は食はねど高楊枝。」「武士は相見互。」といふが如きは、我が國の歷史に大光彩を放てる武士といふ階級の理想を窺ふに足るべく、又これによりて、かゝる理想を愛重したりし全國民の氣風を察し得べし。「泣く子と地頭には勝たれぬ。」といふを見ば、千萬言の歷史的叙述に劣らず。我が國の歷史の

俚諺　ことわざ。

花は櫻木云々　「人は武士、柱は檜の木、魚は鯛、小袖は紅梅、花はみよし野」（一休）

武士は食ねど高楊枝　生活にこせ〳〵心をなやめぬ武士の氣品をいふ。

武士は相見互　武士は互に助け合へ。

地頭云々　やむを得ず、その云ふまゝに從ふことの譬。地頭は鎌倉幕府の職制の一。兵糧米の徵收、盜賊・奸徒の追捕を掌る。

ある時代に於ける地頭といふものの勢力の如何なりしかを察し得べく、「女に家なし。」「貞女は兩夫に見えず。」といふなどは、我が國に固有なる諺とはいふべからざるも、もつて婦女子に關する我が社會制度の一面を窺ふに足るべく、「よめが姑になる。」「老いては子に從へ。」といへば、我が國の家族制度を示す所あり。「さはらぬ神に祟なし。」「棄てる神あれば助ける神あり。」「神は正直の頭にやどる。」「鬼神に橫道なし。」「苦しい時の神だのみ。」などは、宗教思想を示すべく、「袖ふり合ふも他生の緣。」といへば、以て佛教によりて注入せられたる因果思想を見るに足るべし。此等は唯念頭に浮かび出でたるまゝ數例を擧げたるに過ぎず。

歐洲諸國の諺には、夫婦の關係をいへるもの甚だ多く、我が國にては、寧ろ親子の關係をいへるもの多きが如し。「親の

貞女は云々　「忠臣不レ事二君一、烈女不レ更二二夫一。」（說苑）

鬼神に橫道なし　「鬼神はふこしまなし、とがむべからず」（徒然草）

他生の緣　前世からの因緣

心、子知らず、」「子を知るもの親にしくはなし。」「子ゆゑの闇にまよふ。」「孝行をしたい時に親はない。」「可愛い子には旅をさせよ。」「子は三界の首枷。」「子が思ふよりは、親は百倍も思ふ。」「子を持つて知る親の恩。」といふなど、親の慈をいふや至れり盡くせり。その上に「子よりも孫は可愛い。」といへる、何の言かこれにまさりて孫の愛のこまかなることを發表するものぞ。かく親の慈愛を稱ふるものから、俚諺には又能く人情の他面をいふ。「子を棄つる藪あれども、身を棄つる藪なし。」とは、よくも吾人の主我心を言ひ穿てるものといふべし。

一般の人情に、自利の念ほど強きはなかるべし。俚諺の如何に多くが損得の念を主とせるものなるかを見よ。而して其の中に如何に能く普通の人情を穿てるものあるかを見よ。「くださるものは夏も御小袖。」「かたきの家にても口をぬら

子を知るもの云々　「知レ臣莫レ若レ君、知レ子莫レ若レ父。」（韓非子）

子ゆゑの闇にまよふ　「人のおやの心は闇にあられども子を思ふ道にまよひぬるかな」（後撰集）

三界　佛經に、この世の中を、欲界・色界・無色界の三界に別ちたり。

主我心　自分本位。利己心

せ。」「轉んでも唯は起きぬ。」「泣く子も目を見る。」誠に然り、泣く子すら自身を護るには油斷せざるなり。「油斷大敵。」「小を棄てて大に就け。」「長いものには卷かれよ。」「ふときには呑まれよ。」「曲らねば世に立たれず。」などといふ、何れか利益の念を主とせざる。聖人は「知らざるを知らずとせよ。」といひ、俚諺は「知つて知らざれ。」といふ。「鷹は死ぬとも穂をつまず。」など、氣概を稱揚するもあれど、俚諺の大體の教訓は、「かしこかれ。損をすな。」といふにあり。故に「立つて居るものは親でも使へ。」といふ。

俚諺は事の一面を見て、之を誇張する傾あるものから、其の他面をいふに躊躇せざるが故に、一見其の判斷の相反するが如く思はるゝものあれど、かく兩面よりいふ所、能く世態・人情の實相に適ひて、其の判斷概ね公平なり。「好きこそ物の上手なれ。」といへど、「下手の横ずき。」といふを忘れず。「親に似

知らざるを云々　「知レ之爲レ知レ之、不レ知爲レ不レ知、是知也。」（論語）

親に似ぬは鬼子　子の親に似ぬをのゝしりたる語。

ぬは鬼子。」といへば、「形生めども心は生まず。」といふ。かく事の兩面を叩いて、世相の內祕、人情の裏面を穿たんと力むる、これ卽ち俚諺が警戒と諷刺とに富める所以にして、中には一言よく人情の裏面を訐きて、巧みに罵倒し了するものあり。

同樣なる意味の俚諺を集むるも又一興ならんか。「猿も木から落ちる。」「弘法も筆のあやまり。」「智者も千慮に一失あり。」「龍馬のつまづき。」「上手の手から水がもる。」などの類多くあり。同一の俚諺を言ひかへたるの多き、「針の穴から天のぞく。」といふに越えたるはなからん。「管の穴から天のぞく。」「竹の管から天のぞく。」「鑰の穴から天のぞく。」「蘆の髓から天のぞく。」など其の何れか一が原始のものならんか。

我が國の俚諺は他國の俚諺と比して其の性質及び價値は如何。これらの問題を考ふる前には、先づ我が國の俚諺を

採集せざるべからず。予輩は早く適當の準備を具へたる人が此の事に著手せん事を切望せざるを得ず。

（大四　祝の文による）

詩を新しくすることは、私に取つては言葉を新しくすると同じ意味であつた。

たゞ本質に對する感じを新鮮ならしむることによつて、それを直接に私達の生命からつかんで來ることによつて、僅かに言葉の魂を甦らせることが出來よう。それに新しい意義を賦與することも出來よう。

「春」といふ言葉一つでも活きかへつて來た時の私のよろこびは、どんなだつたらう。　島崎藤村

大西祝　文學博士。操山と號す。岡山市の人。京都帝國大學教授たりき。明治三十三年歿、年三十六。

島崎藤村　名は春樹。長野縣の人。文學者。

一五 かぐや姫

春の始より、かぐや姫、月のおもしろう出でたるを見て、常よりも物思ひたるさまなり。或人の「月の顔見るは忌むこと。」と制しけれども、ともすれば、人間（ひとま）には月を見てはいみじく泣き給ふ。

七月のもちの月に出でゐて、せちに物思へるけしきなり。近く使はるゝ人々、竹取の翁に告げていはく、「かぐや姫、例も月をあはれがり給ひけれども、この頃となりては、たゞ事にも侍らざめり。いみじく思し歎く事あるべし。よく〳〵見たてまつらせ給へ。」と言ふを聞きて、翁かぐや姫に言ふやう、「如何なる心地すれば、かく物を思ひたるさまにて月を見給ふぞ。うましき世に。」といふ。かぐや姫、「月を見れば、世のなか心細

かぐや姫物語 一卷。竹取物語。又は竹取の翁物語ともいふ。我が國の最古の小説。作者不詳。

かぐや姫 この物語の中心人物。竹の中より拾ひ來りて青て上げし美姫。

人間 人の見ぬ隙。

七月のもち 七月十五日。

うましき 樂しき。幸福といふ意味の古語。

くあはれに侍り。何事をか歎き侍るべき。」といふ。かぐや姫のあるところに到りて見れば、なほ物思へるけしきなり。これを見て、「あが佛、何事を思ひ給ふぞ。思すらんこと何事ぞ。」と問へば、「思ふ事もなし。物なん心細く覺ゆる。」と答ふ。翁、「月な見給ひそ。これを見給へば、物おぼすけしきあるぞ。」といへば、「いかでか月を見ではあらん。」とて、なほ月出づれば出で居つゝ歎き思へり。夕闇には物思はぬけしきなり。月の程になりぬれば、なほ時々は打歎き泣きなどす。これを見て、仕ふるものども、「なほ物思す事あるべし。」とさゝやけど、親を始めて、何事とも知らず。

八月もちばかりの月に出でゐて、かぐや姫いといたく、人目も今はつゝみ給はず泣き給ふ。これを見て、親どもも、「何事ぞ。」と問ひ騒ぐ。かぐや姫泣く〳〵いふ、「さき〴〵申さんと思

あが佛 「わが本尊とも頼みにしてゐる人」といふ意。

ひしかども、必ず心惑はし給はんものぞと思ひて、今まで過ぐし侍りつるなり。さのみやはとて打出で侍りぬるぞ。おのが身はこの國の人にもあらず、月の都の人なり。それを、昔の契なりけるによりてなん、この世界にはまうで來りける。今は歸るべきになりにければ、この月のもちに、かの本の國より、むかへに人々まうで來んず。さらずまかりぬべければ、思し歎かんが悲しきことを、この春より思ひ歎き侍るなり。」といひて、いみじう泣くを、翁「こは何事をのたまふぞ。竹の中より見つけ聞えたりしかど、菜種の大きさなりしを、わが丈たち並ぶまで養ひ奉りたるわが子を、何人か迎へ聞えん。正に許さんや。」といひて、「われこそ死なめ。」とて、泣きのゝしること、いと堪へ難げなり。かぐや姫のいはく、「月の都の人にて、父母あり。片時の間とて、かの國よりまうで來しかども、かくこの

打出で　「言葉に出す」「話す」などの意。

さらず　避け逃れられずして。「已むことなく」「仕方なし」などの意。

國には數多の年を經ぬるになんありける。かの國の父母の事もおぼえず、こゝにはかく久しく遊び聞えてならひ奉れり。いみじからん心地もせず、悲しくのみなんある。されど、おのが心ならず罷りなんとする。」といひて、諸共にいみじう泣く。使はるゝ人々も、年頃ならひて、立別れなん事を、心ばへなどあてやかに、美しかりつることを見ならひて、戀しからん事の堪へ難く、湯水も飲まれず、同じ心に歎かしがりけり。

かゝる程に、宵うち過ぎて、子の刻ばかりに、家のあたり晝の明さにも過ぎて光りたり。望月の明さを十あはせたるばかりなり。大空より、人、雲に乘りて降り來て、地より五尺ばかりあがりたる程に立ちつらねたり。これを見て、內外なる人の心ども、ものに襲はるゝやうにて、戰はん心もなかりけり。辛うじて思ひ起して、弓矢を執りたてんとすれども、手に力

ならひ　馴れると同意。

いみじからん　大層善き。

あてやかに　氣品ありて。

子の刻　今の午後十二時。

思ひ起して　發奮して。

もなくなりて、痿えかゞまりたる中に、心さかしきもの、念じて射んとすれども、外ざまへ往きければ、あれも戰はで、心地たゞしれにしれて守りあへり。

立てる人どもは、裝束の清らなること物にも似ず。飛ぶ車一つ具したり。羅蓋さしたり。その中に王とおぼしき人、「造麻呂まうで來。」といふに、猛く思ひつる造麻呂も、物に醉ひたる心地して、うつぶしに伏せり。曰く、「汝をさなき人、聊かなる功德をつくりけるによりて、汝が助にとて、片時のほどとて降ししを、そこらの年ごろ、そこらの金賜ひて、身を換へたるが如くなりにたり。かぐや姫は罪をつくり給へりければ、かく賤しきおのれが許におはしつるなり。罪の限りはてぬれば、かく迎ふるを、翁は泣き歎く能はぬことなり。はや返し奉れ。」といふ。翁答へて申す、「かぐや姫を養ひ奉ること二十年餘り

あれも　あら〳〵しく。
しれに　痴れに痴れて。惘然自失の意。
立てる人　天人。
羅蓋　薄絹を張りたる天蓋。
造麻呂　竹取翁の名。
そこらの　多くの意。
身を換へ　こゝでは急に金持になりしことを指す。

になりぬ。片時と宣ふに、怪しくなり侍りぬ。又他處にかぐや姫と申す人ぞおはしますらん。こゝにおはするかぐや姫は、重き病をし給へば、え出でおはしますまじ。」と申せば、その返事はなくて、屋の上に飛ぶ車を寄せて、「いざ、かぐや姫、穢なき處にいかでか久しくおはせん。」といふ。たて籠めたるところの戸、卽ちたゞあきにあきぬ。格子どもも、人はなくしてあきぬ。嫗の抱きてゐたるかぐや姫、外に出でぬ。えとゞむまじければ、たゞさし仰ぎて泣き居り。

竹取心惑ひて泣き伏せる處に寄りて、かぐや姫いふ、「こゝにも、心にもあらで、かく罷るに、昇らんをだに見送り給へ。」といへども、「何しに悲しきに見送り奉らん。われをば如何にせよとて、捨ててはの昇り給ふぞ。具して率ておはせね。」と泣きて伏せれば、御心惑ひぬ。「文を書き置きて罷らん。戀しからんを

嫗　造麻呂の妻。
こゝにも　「自分も」の意。

り〳〵、取出でて見給へ。」とて、打泣きて、「この國に生れぬるとならば、歎かせ奉らぬ程まで侍るべきを、侍らで過ぎ別れぬる事、返すゞ〳〵本意なくこそ覺え侍れ。脱ぎ置く衣を形見と見給へ。月の出でたらん夜は見おこせ給へ。見捨て奉りて罷る空よりも落ちぬべき心地す。」と書き置く。

天人の中に持たせたる筥あり、天の羽衣入れり。又あるは不死の藥入れり。一人の天人いふ、「壺なる御藥奉れ。穢なき處の物聞し召したれば、御心地あしからんものぞ。」とて、持て寄りたれば、些か嘗め給ひて、少し形見とて、脱ぎ置く衣に包まんとす。ある天人、御衣を取出でて著せんとす。その時に、かぐや姫、衣著つる人は心異なるものなり。物一言いひ置くべき事あり。」といひて、いみじく靜かに、おほやけに御文奉り給ふ。あわてぬさまなり。（竹取物語による）

一六　知と愛

知と愛とは、普通には全然相異なつた精神作用であると考へられて居る。併し、余は此の二つの精神作用は決して別種のものではなく、本來同一の精神作用であると考へる。然らば如何なる精神作用であるか。一言にていへば主客合一の作用である。我が物に一致する作用である。何故に知は主客合一であるか。我々が物の眞相を知るといふのは、自己の妄想・臆斷、卽ち所謂主觀的のものを消磨し盡くして、物の眞相に一致した時、卽ち純客觀に一致した時、始めて之を能くするのである。例へば明月の薄黑い處のあるのは、兎が餅を搗いて居るのであるとか、地震は地下の大鯰が動くのであるとかいふのは主觀的妄想である。然るに我々は天文・地質

主客合一の作用　主觀と客觀の合一によつて生ずる精神作用。

物　自我以外のあらゆる外物。

の學に於て全然かゝる主觀的妄想を捨て、純客觀的なる自然法則に從うて考究し、爰に始めて此等の現象の眞相に到達することが出來るのである。我々は客觀的になればなるだけ、益〻能く物の眞相を知ることが出來る。數千年來の學問進歩の歴史は、我々人間が主觀を棄てて客觀に從ひ來つた道筋を示したものである。次に何故に愛は主客合一であるか。我々が物を愛するといふのは、自己を捨てて他に一致するの謂である。自他合一、其の間一點の間隙なくして始めて眞の愛情が起るのである。我々が花を愛するのは、自分が花と一致するのである。月を愛するのは、月と一致するのである。親が子となり、子が親となり、此處に始めて親子の愛情が起るのである。親が子となるが故に、子の一利一害は己の利害のやうに感ぜられ、子が親となるが故に、親の一喜一憂は

己の一喜一憂の如くに感ぜられるのである。我々が自己の私を棄てて、純客觀的卽ち無私となればなる程、愛は大きくなり深くなる。親子・夫妻の愛より朋友の愛に進み、朋友の愛より人類の愛に進む。佛陀の愛は禽獸・草木にまでも及んだのである。

此の如く、知と愛とは同一の精神作用である。物を知るには之を愛せねばならず、物を愛するには之を知らねばならぬ。數學者は自己を棄てて數理を愛し、數理その者と一致するが故に、能く數理を明かにすることが出來るのである。美術家は能く自然を愛し、自然に一致し、自己を自然の中に沒する事によつて、始めて自然の眞を看破し得るのである。又、我は我が友を知るが故に、之を愛するのである。境遇を同じうし相理解する事が愈〻深ければ深い程、同情は益〻濃やかに

佛陀　如來十號の一。略して佛といふ。

なる譯である。併し、愛は知の結果、知は愛の結果といふやうに、此の兩作用を分けて考へては、未だ知と愛との眞相を得たものではない。知は愛、愛は知である。例へば我々が自己の好む所に熱中する時は、殆ど無意識である。自己を忘れて、唯自己以上の不可思議力が獨り堂々として働いて居る。此の時が主もなく、客もなく、眞の主客合一である。此の時が知卽愛、愛卽知である。數理の妙に心を奪はれ、寢食を忘れて之に耽る時、我は數理を知ると共に之を愛しつゝあるのである。又我々が他人の喜憂に對して、全く自他の區別がなく、他人の感ずる所を直ちに自己に感じ、共に笑ひ共に泣く、此の時我は他人を愛し、又之を知りつゝあるのである。愛は他人の感情を直覺するのである。池に陷らんとする幼兒を救ふに當つては、可愛いといふ考すら起る餘裕もない。

以上、少しく知と愛との關係を述べた。今之を宗教上の事に當てはめて考へて見よう。主觀は自力である。客觀は他力である。我々が物を知り、物を愛するといふのは、自力を棄て他力の信心に入る謂である。人間一生の仕事が知と愛との外に無いものとすれば、我々は日々に他力信心の上に働いて居るのである。學問も道德も皆佛陀の光明であり、宗教といふものは此の作用の極致である。學問や道德は、個々の差別的現象の上に、此の他力の光明に浴するのであるが、宗教は宇宙全體の上に於て絕對無限の佛陀その者に接するのである。「父よ、若し聖旨に協はば、この杯を我より離し給へ。されど我が意のまゝをなすにあらず、唯聖旨のまゝになし給へ。」とか、「念佛はまことに淨土に生るゝ種にてやはべるらん。また地獄におつべき業にてやはべるらん。總じてもて存

自力・他力　共に佛經の語。自己修業のはたらきが自力、佛が衆生を濟度せんとしてあらはす力が他力。

父よ云々　新約全書馬太傳。

念佛は云々　歎異抄第二章。

知せざるなり。」とかいふ語が宗教の極意である。而してこの絶對無限の佛若しくは神を知るのは、唯之を愛するによりて能くするのである。之を愛するが卽ち之を知るのである。印度のヴェーダ教や、佛教の聖道門は之を知るといひ、基督教や、淨土宗は之を愛すといひ、又は之に依るといふ。

各自其の特色はないではないが、其の本質に於て同一である。神は分析や推論によつて知り得べき者ではない。實在の本質が人格的のものであるとすれば、神は最大人格的のものである。我々が神を知るのは、唯愛又は信の直覺によつて知り得るのである。故に我は神を知らず、我唯神を愛す、又は信ずといふ者は、最も能く神を知つて居る者である。

（西田幾多郎の文による）

ヴェーダ教 婆羅門教（古代印度宗教の一）のこと。

聖道門 釋迦一代の教法を淨土・聖道の二門に分つ。而して、淨土宗・淨土眞宗・時宗以外の諸宗の大部分は、聖道門と名づく。

西田幾多郎 哲學者。文學博士。石川縣の人。明治三年生。京都帝國大學名譽教授・帝國學士院會員。

一七 世界の四聖

生れて一代の宗師となり、死して百世の儀表となる、聖人にあらずんば、誰かこれを能くせん。釋迦・孔子・ソクラテス・基督の四人、世呼びて世界の四聖と稱す。宜なるかな。

釋迦は西暦紀元前凡そ六百年の頃、印度伽毘羅國の王家に生れき。父は淨飯王、母は麻耶夫人、その本名を悉達多といへり。釋迦は伽毘羅王家の族名にして、佛陀はその出家成道後の尊號なり。その身一國の太子に生れけれども、夙に思を人生の問題に潛め、二十九の歳、妻子を捨てて王城を逃れ、山林に隱れて道を修むること六年。つひに人生の奥義を究めて、無上の正覺に徹底せり。爾來五十餘年の間、北天竺の各地に巡錫して教化を布き、年八十餘にして跋提河の邊に歿し

伽毘羅國 中印度にある舊都。今のウードに當る。

淨飯王 伽毘羅國の王。

摩耶夫人 摩訶摩耶。淨飯王の妃。四十五歳にして、悉達多を産む。

佛陀 如來號の一。智者の義。知らざる事なき意といふ。

正覺 邪を離れ、妄に背きし大悟。

北天竺 北方印度のこと。

跋提河 源をネパールに發し南流してガンヂス河に入る。

ぬ。

今の佛教は卽ち釋迦一代の教訓に本づく。蓋し釋迦の當時、印度には幾多の哲學ありき。されど徒らに思索の高遠を欣びて人生の疑問に適切ならず。偏に幽玄なる談理と慘澹たる苦行とによりて安心の道を求めたり。その流派を樹てて相爭ふ所は、畢竟名目上の優劣のみ。未だ一世の元々をして歸命の大道に就かしむるに足らず。釋迦この間に生れ、その洪大なる慈悲と無邊なる智慧とを以て、一世の木鐸となり、民をしてその歸依する所を知らしめたり。

孔子は名を丘といふ。孔子はその尊稱なり。今を距る二千

挿繪　釋迦石像。

元々　人民の意。萬民。

歸命　佛の教に歸依して、自己の身命をも捧げて念ずること。

一百餘年の昔、支那の魯國に生れき。幼より學を好み、禮を習へり。壯年のころ魯國の官吏となり、傍ら子弟を教へて、夙に令聞あり、學德愈〻進めり。魯の定公の時に至り、擢んでられて大司寇の職に就く。治績大いに擧り、內外その風采を想望す。時に齊侯、魯國の日に盛大に赴けるを嫉み、謀を構へ、定公を

して孔子を用ひざらしむ。孔子時運の非なるを見、五十六歲の老軀を挺し、門下の高足を率ゐて四方の遊說を試みぬ。當時の支那は所謂春秋の亂世なり。周の王室は名のみにして、君臣の大義は蕩然として地を掃へり。或は臣にしてその君を弑するものあり、子にしてその親を害するものあり。强は弱を食み、大は小を併せ、權力の外に道義ある

魯國　周の侯國。周公の子伯禽の封ぜられし處。今の山東省兗州府の地。

定公　魯の三十二世の君。

大司寇　訴訟裁判のことを掌る。

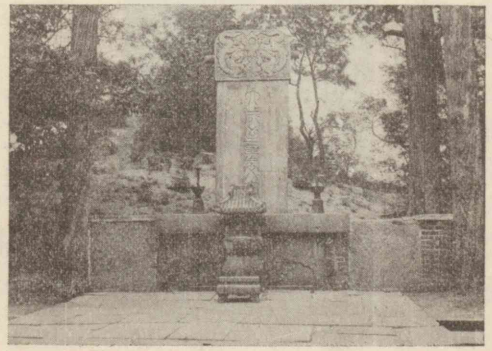
齊侯　齊の景公。

挿繪　孔子（吳道子筆）。

春秋　周の平王四十九年より敬王三十九年に至る二百四十二年間の稱。

なし。教化の陵夷、風俗の頽廢、未だ曾てこの時の如きはあらざりき。孔子既に志を魯に得ず。乃ち慨然として故國を出で、大義名分を天下に唱へて、狂瀾を既倒に回さんとす。志や高且大なりと謂ふべし。

此の如くにして四方に漂浪すること十三年。時非にして道容れられず、世また耳を名教に傾くる者なし。こゝに於て、已むを得ず、老脚蹉跎として再び魯に歸り、歎じて曰く、「嗚呼、わが道遂に窮す。世遂に我を知る者なきか。」と。門弟子貢慰めて曰く、「何ぞ夫子を知る者なからん。」と。孔子對へて曰く、「天を怨みず、人を尤めず。下學して而して上達す。我を知る者はそ



陵夷　丘陵の漸次に平かになる如く、次第に衰ふること。

挿繪　孔子の墓。支那山東省曲阜に在り。

嗚呼云々　史記、孔子世家に、「及ニ西狩見レ麟曰、吾道窮矣。喟然歎曰、莫レ知レ我夫。子貢曰、何爲莫レ知ニ夫子一。子曰、不レ怨レ天不レ尤レ人、下學而上達。知レ我其天乎。（中略）君子病ニ歿レ世而名不レ稱。吾道不レ行矣、吾何以見ニ於後世一哉。」

れ天か。君子は歿して名の稱せられざるを病む。わが道行はれずば、われ何を以てか後世に見えん。」と幾ばくもなくして歿せり。時に年七十三。

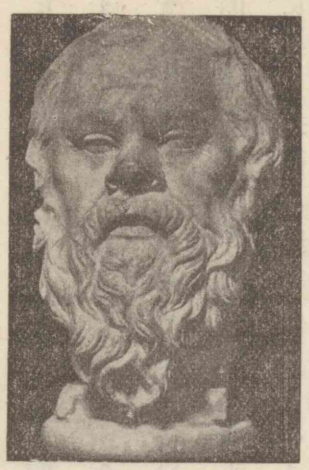
ソクラテスは希臘の雅典に住める一彫刻師の子なりき。その生れたるは凡そ紀元前四百七十年の頃にして、釋迦・孔子と年を隔つること八九十年なり。東西の聖人、あまりに時を隔てずして世に出でたるは奇なりと謂ふべし。希臘の當時は所謂詭辯學派の跋扈せし時代にして、知識は名目の爭に止り、道德は空文の上にのみ尙ばれたり。その狀、なほ釋迦當時の印度の如く、人生社會の實際に關しては、殆ど裨益する所なかりき。ソクラテスは慨然として時弊の救濟を以て自ら任じ、盛に道を講じ、理を談じ、諄々として倦まず。詭辯學者の輩に遇へば、則ちその獨得の論法をもつて、辯難攻擊し

雅典　アテネ Athens. 古代希臘アッチカ州の首都。今希臘共和國の首府。

詭辯學派　ソフィズム。Sophism. 西暦前第五世紀の後半において、一時希臘に勢力ありし學派。その始祖をプロータゴラスといふ。

て一歩も假借せず、侃諤の正義、その稀代の雄辯と相伴なひて一世を風靡せり。

然るに、喬木は風に折らるゝ喩に漏れず、群小のソクラテスに快からざる者相謀りて、國法に背ける者としてソクラテスを讒訴せり。その訴狀に曰く、「ソクラテスは國教を信ぜずして異教を創め、以て人心を惑亂せり。宜しく國法により て死刑に處すべし。」と。ソクラテスがこの讒訴に對する抗議は實に堂々として、壯快を極めたるものなりき。慨世憂國の至誠を以て國民に訴ふるところ、語々百世の眞理ならざるはなし。然れども判官はソクラテスを以て傲岸不遜なりとなし、死刑を宣告せり。ソ



挿繪　ソクラテス。

クラテス泰然として驚かず、曰く、「命のみ。」と。その獄中にあるや、常にその門弟子を集めて、生死・靈魂・未來のことを說き、人の脫獄を勸むるに對しては、輙ち答へて曰く、「予はたゞ正義に導かれんのみ。死はた何爲るものぞ。人生の幸福は靈魂の上にあるを知らずや。」と。終に從容として毒を仰いで歿せり。將に歿せんとするや、弟子遺言を求む。ソクラテス曰く、「爾一鷄を以てアスクレピアスの神に捧げよ。」と。蓋し曾て病みし時、平癒を祈りて謝を致すことを忘れしなり。希臘の聖人ソクラテスは、此の如くにして逝きぬ。年七十。

基督は本名を耶蘇といふ。基督は「膏灌がれたる者。」といふ義にして、教徒の奉りたる尊稱なり。猶太のベトレヘムに生れき。その生後四年を以て、西曆紀元第一年となす。父はヨセフと呼べる賤しき木匠にして、母はマリヤといへり。長じて

アスクレピアス Asclepiades. 醫術の神。

ベトレヘム Bethlehem. イエルサレムの南方の一小村。

ヨセフ Joseph. ユダヤ族ナタンの子。

マリヤ Maria. ヨセフの妻。ベトレヘムの旅舍に耶蘇を產む。

三十歳の頃、豫言者ヨハネの洗禮を受けて、始めて傳道の生涯に入り、爾來三年の間、猶太の各地を歷遊し、諸の迫害に屈せずして、その福音を傳へたり。

抑、當時は羅馬帝國の榮華その極に達し、禍亂の萌芽その中に胚胎し、災異荐りに至りて天下寧日なし。殊に基督の故國たる猶太は、久しく暴君の收斂に疲れ、異邦人の侮慢を被れり。民衆は徒らに珍奇の淫祠を崇拜して益〻放縱の俗に流れ、學者は詭辯を弄びて空しく人を惑はすのみ。玆に於て、一世の人心は觖焉として偉人の現出してこの暗黑の社會を照破せんことを渴望せり。基督この間に生れ、自ら「救世の使命を負へる神の子なり。」と稱し、昂然としてその偉大なる新教理を宣傳せり。遠近靡然としてこれに赴く。僧侶・學者・官吏等、これを喜ばず、以て猥りに新法・異說を唱へて、民を迷はすものなりとなし、基督を捕へて磔刑に處せり。基督豫めこの事あらんを慮り、晏然として騷がず、靜かに祈りて曰く、「神よ彼等を許せ。彼等はその爲すべき所を知らざればなり。」と。その刑場に赴くや、路傍に哀哭する女子を顧みて曰く、「エルサレムの女子よ、我がために哭くことなかれ。唯己と己の子とのために哭け。」と。此の如くして、基督は三十三年の短き生涯にて、十字架上の露と消え去りぬ。基督の死後その弟子等は、激烈なる迫害に抵抗して、その敎を天下に弘めぬ。基督敎卽ちこれなり。

以上は四聖の略傳なり。その人物・事蹟の高大にして雄偉なる、永く後人の景慕し崇拜すべき所なり。四聖の內、釋迦を除いては、いづれも轗軻不遇の中にその生を終へたり。孔子

挿繪　基督。

洗禮 Baptism. 罪惡より洗ひ淨めて改宗する聖式。

ヨハネ Johannes. 西紀前三四年ヒラト王の治世の頃の人。洗禮者と呼ばる。故ありて下獄し、死す。

陜焉 ものたらわ貌。

神よ云々 路加傳第二十三章三十四節に見えし言葉。

エルサレム云々 同二十七節以下に見えし言葉。エルサレムは猶太の主都。

轗軻 時に合はずして、世に用ひられざること。不遇に同じ。

は志を四方に得ず、その經綸を抱いて空しく詠歎の間に歿せり。ソクラテスと基督とは、いづれも讒奸の手に罹り、或は毒を仰ぎ、或は盜賊と並びて十字架上に釘殺せられたり。慘なりといふべし。然れども、これらの人々の志す所は、天下後世にありて、現世の禍福と一身の安堵とは、毫もその顧慮する所にあらず。故にその死に就くや、晏然として猶歸するが如し。孔子はその身の不幸を憂へずして、却りて「わが道行はれずば、われ何を以てか後世に見えん。」と嗟歎せり。釋迦は衆生のためにその妻子と王位とを抛ちて、食を路傍に乞へり。ソクラテスは死罪の脅迫に遇うて揚言して曰く、「正義を信ずる者に取りて、死はた何爲るものぞ。我をして一日の生あらしめんか、乃ちその一日も國民の迷を覺さざるべからず。」と。基督は己を罪に陷れたる者のために神に祈りたり。嗚呼

わが道行はれず云々　第一五六頁參照。

何ぞその慈悲の洪大にして無邊なる。

四聖はその生れたる處と時とを異にす。故にその教理にも、また多少の差違なきを得ず。今その要を擧ぐれば左の如し。

釋迦の教理は、煩惱を斷滅して涅槃に達するを主旨とす。それ人生は苦に始りて苦に終る。生老病死、いづれか苦にあらざるべき。故に吾人は現世を苦界と觀ぜざるべからず。而して苦の原因は情慾にあり。情慾の原因は我の一念に執著するにあり。故に吾人は我の一念を脫却して無我無念の境界に達せざるべからず。これ人生究竟の樂地にして、涅槃卽ちこれなりと。

孔子の教は、身を修め、家を齊へ、天下を治むるにあり。而して身を修むる基は孝にあり。故に孝は百行の本なり。君臣の

煩惱　無明貪慾の惑ひ。

涅槃　梵語。無爲寂滅などと譯す。圓滿究極の眞相。

我の一念　我執の妄念。

身を修め云々　大學に「古之欲レ明二明德於天下一者ハ先治二其國一。欲レ治二其國一者先齊二其家一。欲レ齊二其家一者先修二其身一。欲レ修二其身一者先正二其心一。欲レ正二其心一者先誠二其意一。」

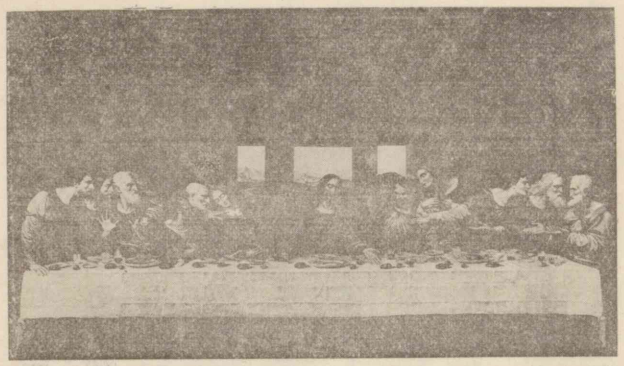
孝は百行の本云々　古文孝經の序に出づ。

義、父子の親、夫婦の別、長幼の序、朋友の信、皆これに本づく。人は生れながらにして美德を天に稟くれども、後天の氣質によりてこれを完うする能はざるもの多し。教育の要こゝに於てかあり。既に教育を受けて、身既に修らば、家自ら齊ふべく、家齊はば、國自ら治るべく、國治らば、天下自ら太平なるを得べし。故に孔子の教は一身の修養に始り、治國平天下に終るものと見るを得べし。

ソクラテスの教は、所謂知德合一説なり。おもへらく、眞正の知識は卽ち道德なり。故に行ふと知るとは、もと一體のみ。知つて而して行はざると、行うて而して知らざるとは、共に知識、道德の眞正なるものにあらず。眞理を確信し、その實行を以て最上の義務となせば、正義自らその中にあり。正義は靈魂の滿足なり。靈魂は肉體と異なりて、不朽不滅なるもの

なり。故に人の正義を行ふ時、現世の利害は決して顧慮すべきにあらず、道德は富貴のために存せず、然れども富貴は道德の中にありと。

基督の教は愛の教なりと稱せらる。所謂山上の垂訓は、三年傳道の極意を包括するを以て、左にその大略を擧げん。曰く、「心の貧しきものは福なるかな、天國はその人の有なればなり。悲しむものは福なるかな、その人は慰めらるべければなり。飢ゑ渴く如く義を慕ふものは福なるかな、その人は飽くことを得べければなり。憐むものは福なるかな、その人は憐



山上の垂訓　馬太傳第五章より七章に亙つて出てたり。その山は猶太のガラリヤ州に在り、今テルハツチンと呼ぶ。

挿繪　最後の晩餐。

みを得べければなり。心の清きものは福なるかな、その人は神を見るべければなり。惡に敵するなかれ。人若し汝の右の頰を打たば、左の頰をも轉じてこれに向けよ。汝の隣人を慈しみて、汝の敵を愛せよ。人に見せんがために、義をその前に行ふなかれ。右の手に爲す所を左の手に知らしむるなかれ。僞善者の行に倣ふなかれ。隱れたるを鑑み給ふ神は、あらはに報い給ふべければなり。人は神と財とに兼ね事ふることは能はず。人を是非するなかれ。人の目にある塵を見ながら、何ぞおのが目にある梁木を見ざる。汝等求めよ、然らば與へられん。尋ねよ、然らば遇はん。叩け、然らば啓かれん。窄き門より入れ。沈淪に至る門はその路大きく、これに入る者は多し。嗟呼、いかに生命に至る門は窄く、その路は細く、これを得るものの少きぞ。凡そこの訓を聽きて行ふ者は、磐の上に家建てたる智者の如く、聽けども行はざるは、砂上に屋を建つる愚人の如し。」と。基督教の精髄は、後世の人樣々の色彩を加ふれども、實にこの山上の垂訓に基す。

此の如きは、四聖の傳記、及び教義の大要なり。嗚呼、四聖逝いて既に幾千年ぞ。而してその教の今尙凛々として生氣あるを見よ。世界累代の幾億兆の民衆は、この教に憑りてその道念を養ひ、その安慰を求む。四聖の如きは實に人類の永遠なる救濟者なりと謂ふべし。その遺德の高大なる、それ何を以てかこれに比せん。（高山樗牛の文による）

高山樗牛　文學博士。名は林次郎。山形縣に生る。明治三十五年歿、年三十二。

〔終〕

三　科白的文學

（卷七、附錄より續く）
歌謠・舞曲・劇・音曲等

古事記
日本紀〔前出〕
日本紀歌註（顯昭）。古事記和歌略註（眞淵）。記紀歌の解（橘守部）。
風土記〔有朋堂文庫〕
古事記〔前出〕
萬葉集〔前出〕
旋頭歌評釋（神谷保朗）。

神樂歌〔國歌大系〕〔有朋堂文庫〕
催馬樂〔同右〕
神樂催馬樂通解（今井彦三郎）。神樂歌評釋（千秋季隆）。催馬樂考（眞淵）。
朗詠〔同右〕
和漢朗詠集〔同右〕
和漢朗詠集註（季吟）。和漢朗咏集新釋（金子元臣等）。
郢曲〔同右〕
今樣〔同右〕

宴曲〔有朋堂文庫〕〔續帝國文庫〕
宴曲全集（吉田東伍）。

*謠曲〔日本文學大系〕〔有朋堂文庫〕〔謠曲叢書〕
謠曲通解（大和田建樹）。謠曲講義（鈴木暢幸）。謠曲物語（和田萬吉）。

*狂言〔有朋堂文庫〕〔日本文學大系〕〔狂言全集〕
狂言評註（大和田建樹）。新釋狂言記（佐久間信吉）。
田樂
日本歌謠史（高野辰之）。

古淨瑠璃及舞の本集〔近代日本文學大系〕
近松門左衞門集〔有朋堂文庫〕〔國民文庫〕〔近代日本文學大系〕
紀海音集〔續帝國文庫〕
竹田出雲集〔同右〕
近松半二集〔同右〕
淨瑠璃名作集〔有朋堂文庫〕〔國民文庫〕〔近代日本文學大系〕
集林子評釋（藤井乙男）。評註近松著作集（山田美妙）。

脚本集〔有朋堂文庫〕〔續帝國文庫〕〔近代日本文學大系〕〔日本戲曲全集〕

默阿彌全集
明治大正文學全集
近代劇大系
日本戲曲集

近代歌謠集〔有朋堂文庫〕
日本歌謠類聚〔續帝國文庫〕
俗曲大全〔同右〕
日本音曲全集
俗曲文庫〔海賀變哲〕
俚謠集〔近世文藝叢書〕
民謠小唄新釋(松村英一)。俗曲評釋(佐々政一)。

四 叙事的文學

神話・傳說・物語・小說等

古事記〔前出〕
日本書紀〔國史大系〕〔新釋日本文學叢書〕
日本書紀通證(谷川士清)。日本書紀通釋(飯田武鄕)。
竹取物語〔日本文學大系〕〔國民文庫〕〔國文叢書〕〔有朋堂文庫〕
竹取物語解(田中大秀)。新釋竹取物語精解(吉川秀雄)。

伊勢物語〔同右〕
伊勢物語拾穗抄(北村季吟)。勢語臆斷(契沖)。
大和物語〔同右〕
大和物語拾穗抄(季吟)。大和物語直解(眞淵)。
宇津保物語〔同右〕
落窪物語〔同右〕
落窪物語講義(中村秋香)。校註落窪物語(吉川秀雄)。
*源氏物語〔同右〕
源氏物語湖月抄(季吟)。源氏物語新釋(眞淵)。源氏物語玉の小櫛(宣長)。源氏物語評釋(萩原廣道)。定本源氏物語新解(金子元臣)。
狹衣物語〔同右〕
濱松中納言物語〔日本文學大系〕〔國文叢書〕
堤中納言物語〔同右〕
校註堤中納言物語(久松潛一)。堤中納言物語評釋(清水泰)。
住吉物語〔日本文學大系〕〔國文叢書〕
取替ヘばや物語〔同右〕
多武峯少將物語〔日本文學全書〕〔國文大觀〕
鳴門中將物語〔同右〕
秋の夜の長物語〔日本文學大系〕〔國文大觀〕
松帆浦物語〔同右〕

假名草子集〔近代日本文學大系〕

元祿時代小說集〔國民文庫〕
浮世草子集〔江戸時代文藝資料〕〔近代日本文學大系〕
西鶴集〔有朋堂文庫〕〔帝國文庫〕
八文字屋本〔同右〕
京傳傑作集〔帝國文庫〕〔近代日本文學大系〕

道中膝栗毛〔同右〕
浮世風呂・浮世床〔同右〕
十返舍一九集〔近代日本文學大系〕〔續帝國文庫〕
式亭三馬集〔帝國文庫〕〔近代日本文學大系〕
滑稽本集〔續國民文庫〕〔帝國文庫〕
種彥傑作集〔帝國文庫〕〔續帝國文庫〕
洒落本代表作集〔近代日本文學大系〕
爲永春水集〔近代日本文學大系〕
人情本傑作集〔帝國文庫〕〔近代日本文學大系〕
明治大正文學全集

現代日本文學全集
大衆文學全集

古事記〔前出〕
日本書紀〔前出〕
風土記〔前出〕
今昔物語〔日本文學大系〕〔國史大系〕
攻證今昔物語(芳賀矢一)。
宇治拾遺物語
宇治拾遺物語註釋(三木五百枝等)。
古今著聞集〔日本文學大系〕〔國文叢書〕〔國民文庫〕
御伽草子〔日本文學大系〕〔有朋堂文庫〕
新編御伽草子〔萩野由之〕
假名草子集〔近代日本文學大系〕
擬物語〔近世文藝叢書〕
萬物滑稽合戰記〔續帝國文庫〕
黃表紙集〔有朋堂文庫〕〔續帝國文庫〕〔近代日本文學大系〕

日本お伽噺集〔巖谷小波〕
日本童話集〔菊池寛〕
少年文學集〔改造社版〕

民謡・童謡

日本民謡大全〔童謡研究會〕
日本民謡作家集〔北原白秋〕
日本新童謡集〔北原白秋〕
日本童謡集〔西條八十〕

榮華物語〔日本文學大系〕〔國史大系〕
榮華物語詳解（和田英松等）。
大鏡〔同右〕
大鏡短觀抄（大石千引）。大鏡詳解（佐藤球）。
水鏡〔日本文學大系〕〔國史大系〕〔國文叢書〕
水鏡詳解（江見清風）。
今鏡〔同右〕
今鏡新註（關根正直）。
保元物語〔日本文學大系〕〔國文叢書〕〔國民文庫〕〔有朋堂文庫〕
平治物語〔同右〕
保元物語評釋（鳥野幸次）。校註保元平治物語（同上）。講本保元物語（玉井幸助）。保元平治物語解釋（今泉定介）。
*平家物語〔同右〕
平家物語評釋（內海弘藏）。新釋平家物語（高木武）。
源平盛衰記〔同右〕
吉野拾遺〔日本文學大系〕〔國文大觀〕〔國文叢書〕
*增鏡〔同右〕
增鏡詳解（和田英松等）。增鏡新釋（永井一孝等）。新釋增鏡（高木武）。
*太平記〔日本文學大系〕〔國文叢書〕〔有朋堂文庫〕
太平記註釋（萩野由之）。太平記新釋（石田貞吉）。
義經記〔國文叢書〕〔有朋堂文庫〕
曾我物語〔國文叢書〕
雨月物語〔帝國文庫〕〔有朋堂文庫〕
校註雨月物語（佐藤仁之助）。雨月物語新釋（鈴木敏也）。
本朝水滸傳〔帝國文庫〕
石川雅望集・上田秋成集〔有朋堂文庫〕
雅文小說集〔同右〕
里見八犬傳〔有朋堂文庫〕〔帝國文庫〕
馬琴傑作集〔帝國文庫〕〔近代日本文學大系〕

——（終）——

大正十三年十月三十日　發行
大正十四年二月　九　日　訂正再版發行
昭和五年九月二十六日　第二版印刷
昭和五年九月二十九日　第二版發行
昭和六年一月二十八日　第二版訂正再版印刷
昭和六年二月　一　日　第二版訂正再版發行

女子國文新編（第二版）全十册奥附
卷七　卷八　定價　各金六拾錢

著作者　垣內松三

發行兼印刷者　東京市神田區美土代町二丁目一番地　株式會社文學社　小林竹雄

印刷所　東京市神田區錦町三丁目二十五番地　文成社

發兌　東京市神田區美土代町二丁目一番地　株式會社文學社
電話神田三五一番
振替口座東京三八七八番

關西一手販賣所　大阪市西區靱北通り二丁目　株式會社盛文館
電話土佐堀一五二三番
振替口座大阪七四三番

不許複製